

都道府県史から見る近世日本染織技術の伝播 （中間報告）

菊池理予・中村弥生

はじめに

東京文化財研究所では、文化財保護に資することを目的として染織技術の伝承に関する調査研究を行っている。近年、課題となっているのは、染織技術を支える原材料や用具を作る技術が急激に失われており、それら情報をつなぐネットワークも希薄なことである。では、受け継がれてきた技を後世へ残すために必要なこととは何であろうか。その方策を考えるためには、染織技術やそれを支える技術が我が国にどのように分布し、またどのように相互に関連しながら受け継がれてきたのかという情報整理が不可欠ではないだろうか。

無形文化は、日々変容するものである。だからこそ、これまでの我が国における染織技術についての情報を整理し、いまに受け継がれてきた「意義」を明確化し、次世代へ受け継ぐ必要があるのではないだろうか。本稿では、我が国における染織技術の伝播を検討するための基礎資料として、都道府県史を用いて整理を行った。

1. 研究背景と目的

これまでの染織史研究は作品を中心として、その伝来や施された技法の解明、意匠による文化史的意義を検討することに主眼が置かれてきた。そのため、技術という「無形」の要素についてはあまり関心が注がれてこなかった。そこで、筆者は染織技術の基礎情報の整理として、まず初めに江戸時代17世紀後半における染織関連の特産物の分布とその品目の整理を行った¹⁾。そこからは、染織技術に関わる項目が、原材料、生地、完成物と様々な状態で流通していた様子や、現在において各地域に伝承する染織技術は、江戸時代17世紀後半にはすでに多くが培われていたことが明らかとなった。さらに、『和漢三才図会』（正徳3〈1713〉年）には、同種の特産物がいくつかの地域においてみられ、染織品の産地ごとの優劣が記されていた。このような他産地と比較するという行為は、地域間の技術伝播に影響を与えたと考えられる。染織技術とは、そもそも自然発生的にその土地に生まれるだけでなく、他の地域から大きな影響を受けていると推測され、各地にもたらされた技術は産地独特の技術として受容され、発展したと考えられる。

各地域における材料や道具の選択は様々な要因があり、それが残されてきた作品などにも色濃く反映されていると考えられる。しかしながら、これまでの研究では、各地域の特徴は模様表現や技法から検証されながらも、他地域からの影響に関する検証は伝承されてきた地域の中でしか語られておら

ず、俯瞰的な視野によるものとは言い難かった。つまり、それぞれの地域の歴史の情報をつなぐような整理は行われてこなかったのである。

そこで、本稿では全国的に情報を収集するため、都道府県史に注目した。都道府県史は二次資料であり、通史編、産業編、民俗編、美術工芸編など、様々な専門家から見た地域の歴史が集約されている。今回、異なるジャンルの研究者が執筆している都道府県史を利用することで、我が国における染織技術伝播の基礎情報を多く集められると考えた。今後の我が国における染織技術伝播の考察に向けて、まずは基礎資料となる都道府県史から見る技術伝播の情報を整理することとした。

2. 研究方法

本稿では、都道府県史（263冊）から染織関連項目の抽出を行い、記述（5,115件）を内容ごとに分類した。使用した都道府県史を巻末に一覧で示す。記述内容の分類は、県番号、出典、出版年、開始頁、終了頁、繊維（絹・麻・木綿等）、染織工程、物流、技術伝播、特産品、日用品、キーワード・備考、時代、本文概要の項目で整理した。作業は、この記述が、技術伝播や流通の基礎情報となることを考慮し、記載された染織技術の生産目的が換金物であるのか、実用品であるのか、または藩などの保護を受けた特産物であるのか、記載情報から原材料や制作物の入荷・出荷の情報がないか等を留意して抽出をした。これら抽出した記述一覧は科学研究費の報告書に資料としてまとめている²⁾。

本稿では、時代を「近世」にしほり、地域間における技術伝播に関わる記述を項目ごとに整理した（3-1）。さらに、これらに記された技術伝播の要因を抽出し整理した（3-2）。

都道府県史はそれぞれの県や執筆者の専門性により執筆態度が異なる。記述の典拠が、文献や資料より引用されるものもあれば、聞き書き（古老より聞いた等）を記している場合もある。さらに、執筆時の研究成果に依るものも見られる。本稿では、記述情報の典拠の検証は未完成であり、都道府県史の記述を整理したに留まる。同列に扱うことのできない情報を同様に扱うことは批判を受ける点であるが、今回は実際の考察に入る前の基礎情報の整理を目的としている。あくまで本稿は経過報告であり、今後、技術伝播からみた当該技術の各地域に受容と発展を考察するうえでは、地域に残された他資料とともに、情報の丁寧な検証をした上で、アップデートする必要があることをお断りしておく。さらに、言葉の示す意味が時代ごとに変遷していることも考えられるため、これからの考察には、染織技法書などとの照合も必須といえる。

3. 都道府県史から見た近世の染織技術の伝播

3-1 近世における技術伝播

都道府県史に見られる技術伝播に関する記述のうち、近世までの地域間の技術伝播を養蚕・製糸（図1）、絹織物（図2）、木綿・木綿織（図3）、麻・麻織物（図4）、藍・紅花・紫根（図5）、機（図6）、緋（図7）の項目ごとに日本地図に示した。また、それ以外の項目については、一覧表にまとめた（表1）。その他の情報には、緬羊、媒染材として用いられた明礬、用具である針、染色技法

や型染、晒、また、衣服である紙子、寝間着・モンペ等の項目があった。

一方、時代による傾向を理解するために、1603年以前と江戸時代を8つに区分した。この区分は、抽出された情報を効果的に考察できるよう本稿に併せて分類したものである。

【時代区分】

古代 ～慶長（1603年）

江戸時代Ⅰ 慶長（1603年）～慶安（1652年）

江戸時代Ⅱ 承応（1652年）～元禄（1704年）

江戸時代Ⅲ 宝永（1704年）～正徳（1716年）

江戸時代Ⅳ 享保（1716年）～明和（1772年）

江戸時代Ⅴ 安永（1772年）～享和（1804年）

江戸時代Ⅵ 文化（1804年）～文政（1831年）

江戸時代Ⅶ 天保（1831年）～安政（1860年）

江戸時代Ⅷ 万延（1860年）～慶應（1868年）

抽出された情報は江戸時代全般に見られるが、地域や項目（専売となる時期）によって活発な伝播が行われる時期に偏りが見られる。これは、版本などの印刷文化の発達による影響や都道府県史を使用したことによる記述内容の差が関わることは考慮しなければならないが、それだけでなく、技術伝播が盛んとなっているように感じられる。国外から伝播する時期は鎖国の影響もあるのか時代が限られる。

さらに、項目によっても、時代的な偏りがある。例えば、養蚕・製糸（図1）、木綿・木綿織（図3）の場合には江戸時代Ⅴ期「安永（1772）～享和（1804）」、機（図6）の場合には江戸時代Ⅵ期「文化（1804）～文政（1831）」である。江戸時代Ⅴ期については、田沼時代の専売制の奨励などとの影響を考察する必要がある。また、縮緬の伝播は縮緬（図2A）のとおり江戸時代Ⅳ「享保（1716）～明和（1772）」に集中している。

一方、特産地からみると山城・丹後、特に西陣周辺からの技術の移動が江戸時代全般に見られることが理解できる（図8）。拙稿³⁾でも述べた通り、17世紀後半において山城国は染織技術に関わる特産品の項目点数が非常に多い。藍の項目に注目すれば、『毛吹草』（寛永15（1638）年序）、『萬買物重宝記』（元禄5（1692）年刊）には、山城の特産品として「藍（あい）」が見られる。藍・紅花・紫根（図5）と照合すると、山城における藍の成立は早く、その技術は現在の産地である阿波（徳島）へと伝播したと推測される。さらに、注目されるのは今回、抽出した情報には技術者、商人など多くの人々の名前が記されていることである。東の西陣と称される桐生とのやりとりについて興味深い記述が見られるので以下に引用する。

貞享・元禄期に糸絹の京都への「登せ」が開始され、宝永年中から登せ糸絹の荷数が増加していった。こうした京都糸絹問屋との取引量の増大に伴って、人々の往来も盛んとなった。京都から問屋の手代が桐生に派遣され、そのまま居ついて染物問屋を開業する者が出始めた。京都糸絹問屋近江屋新十郎の手代平兵衛が桐



図1 養蚕・製糸

養蚕・製糸

- ①15世紀中頃（1450）：中国→久米島（沖縄）
久米島の堂比屋（堂之大親）が五百年前中国から天文学とともに養蚕の技術を学び帰り、その郷党に伝授して次第に普及した。
- ②永禄年間（1558-1570）：信州（長野）→八尾村（現富山県富山市）
八尾村館某を信州に派遣し、養蚕技術を習得させ、源川原に桑を植え付け、八尾村民に伝習した（『八尾町史』、『八尾史談』）。
- ③天正（1573-1593）以前：美濃（岐阜）・尾張（愛知）・山口等→会津若松
信州（長野）→南会津郡方部
天正以前に美濃・尾張・山口等より技工をやとい、製糸・綿掛（真綿は市場に商品に出ている）が行われている。
一方南会津郡方部は信州よりの入込商人で発達したと推定される養蚕業があり、それは一貫作業である（『会津風土記』）。
- ④天正6（1578）年：大鋸屋村（現富山県南砺市）・越前国板倉（福井）・尾張国清洲（現愛知県清須）→城端（現富山県南砺市）
町の伝承で城端絹の租と伝えられる畑家は四家あり、この四家に共通なことは、出身地が大鋸屋村であることと、城端に出た年が天正六年にあたることである。
この大鋸屋村より来住した絹屋四家のほかに、初期の城端絹の発展に関係あると思われるのは、越前国板倉村より来住し越前屋を屋号とする六家と、尾張国清洲より来住し尾張屋を屋号とする三家である。
- ⑤慶長年間（1596-1615）：奥羽伊達郡梁川地方（現福島県伊達市）・但馬国養父郡（兵庫）・江州（滋賀）→井波町（現富山県南砺市）
井波町蚕種業の起源は、藤橋村権右衛門が関東に遊歴したさい、奥羽伊達郡梁川地方から伝習し、近隣に広めたことにあるといわれる。
但馬国養父郡に学び、その帰途江州の養蚕地を巡視し、以後、藁座に替えて釣棚法を案出。
- ⑥尚享31／万暦47／天和5（1619）年：越前（福井）→沖縄→久米島（沖縄）
越前の盛元龍（阪元普基入道宋味：俗に京味入道、名乗りは普基）が旅で沖縄に来て、那覇に居住した。
王命を奉じて久米島に行き、桑の栽培・養蚕を指導し、養蚕製紡を教えた。
- ⑦寛文～元禄期（1661-1704）？：会津（福島）→栃尾（現新潟県長岡市）
栃尾の養蚕の技術などは六十里越・八十里越を経て会津地方から伝わったと考えられている。
- ⑧貞享・元禄年間（1684-1704）：八尾（現富山県富山市）→付近村落 ※矢印なし
貞享年間、八尾の山屋善右衛門や紺屋治兵衛が蚕種製造に尽力し、付近の村に飼育を奨励。
元禄年間になると、付近村落の養蚕指導者として八尾の善右衛門や治兵衛の他に水口屋久右衛門らがあがった（『八尾町史』）。
- ⑨元禄（1688-1704）頃か？：京都→仙台藩（現宮城県）
「勤功録」を検討すると、初めは京阪地方の生糸を輸入して織り方を行っていた。これは、小松家弥右衛門をはじめその弟子たちはほとんど京西陣より呼び下されて勤仕したがためて、勿論東北の生糸は京阪地方の物より質が劣っていた理由にもよるであろう（「小松家勤功録」）。
- ⑩享保（1716-1736）の中頃：福島→仙台藩（現岩手県）
吉兵衛妻子（穀町に住んでいる福島者）によって蘭より絹糸をとることが伝えられ、
菊池道中の妻によって懸け取り法が工夫された（『遠野古事記』（『南部叢書』第四冊所収））。
- ⑪宝暦年間（1751-1764）以後？：美濃国曾代村（現岐阜）→福光村（現富山県南砺市）
福光の曾代系の起源は、美濃国曾代村から福光村に引越し医業を営んだ人の妻が蚕を飼い、糸を挽くのを見習い覚えたのに始まると伝えられている。
この時期については慶長のころとも、寛文年間ともいわれているが、文政6年の福光村役人の書上からみると、宝暦年間以後の産物となる。
- ⑫安永3（1774）年：福島、伊達・信夫→秋田藩（秋田）
秋田県では福島商人絹屋勘十郎の「村々江養蚕方被立置」による伊達蚕種紙専売・養蚕指導が行われることになった（『秋田県史』資料「近世編」下）。
- ⑬安永9（1780）年：福島伊達郡木原→河辺郡石川村（現秋田県秋田市）→近在の荒川村・淀川村・船岡村（大仙市）、神内村・岩見山内（秋田市）
機業の先覚者とされている遊蚕石川滝右衛門は、養蚕の本場福島伊達郡木原から河辺郡石川村（河辺町和田）に移住し、近在の荒川村・淀川村・船岡村・神内村・岩見山内などを巡回して養蚕を指導した。
ついで天明6（1786）年には、養蚕指導の手を「城下地廻川辺郡太平沢目」などへ伸ばした（『秋田県史』資料「近世編」下）。
- ⑭天明4（1784）年：栃尾村（現新潟県長岡市）→古志（新潟）→北魚沼（新潟） ※矢印なし
栃尾村（栃尾市）の庄屋植村角左衛門（元文3～文政5）が考案した、棚飼または祖桑飼と称する飼育法が古志・北魚沼へ伝わった。
- ⑮寛政年間（1789-1801）以前：福島地方→置賜地方（山形）
置賜地方では、福島伊達地方から伝習された養蚕飼育法（温暖育）が普及。
- ⑯寛政期（1789-1801）：先進地→愛媛 ※矢印なし
愛媛では先進地からの桑の接木や仕立法、進んだ掃立方が伝えられ、専門の養蚕家も現れた。
- ⑰寛政期（1789-1801）：伊達地方（福島）→秋田藩
秋田県が本格的に養蚕を行なったのは寛政時代からで、主として伊達地方（福島県）に範をとっており栽培桑は伊達桑と称して、同地方から桑苗木を仕入れて来ている。
- ⑱寛政4（1792）年頃：信夫・伊達地方（福島）→置賜地方（現山形）
信夫・伊達地方から置賜地方へ飼蚕法（温暖育）が伝わる。藩内での養蚕指導者は成田村の鈴木善四郎。
- ⑲寛政9（1797）年：信濃・関東→陸奥国伊達・信夫郡→福島県伊達郡梁川町→気多郡納屋村（現兵庫県豊岡市）
上垣守国（養父郡蔵垣村（大屋町）の村役人で通称伊兵衛）が、蚕糸業技術をもとめて信濃・関東から陸奥国伊達・信夫郡に赴く。
帰国して陸奥国梁川（福島県伊達郡梁川町）と土質が酷似しているとみて、気多郡納屋村（城崎郡日高町）に蚕室をたてて改良に努め、享和3年からは自宅にこれを移したという。
- ⑳寛政9（1797）年頃：陸奥国福島（福島県福島市）→丹後国：竹野郡芋野村（京都府竹野郡弥栄町）
但馬国：久美浜村（京都府熊野郡久美浜町）
最上といわれる陸奥国福島（福島県福島市）の蚕種を取り寄せ、丹後国は竹野郡芋野村（京都府竹野郡弥栄町）孫左衛門、但馬国は久美浜村（京都府熊野郡久美浜町）雄次の世話で領内に配付することを決め、技術上の指導を行なった。
- ㉑寛政10（1798）年頃：丹波（京都・兵庫）→置賜地方（山形）
米沢で夏蚕（丹波蜜）は丹波からはいったものと思われる。

養蚕・製糸

- ②文化2（1805）年：上野国渋川（群馬）→荻野山中藩（現神奈川県厚木市中荻野）
上野国渋川の吉田友直著『養蚕須知』（寛政元（1789）年）の春繭の要略を荻野山中藩が『養蚕要略』として発行し、荻野山中藩が領内に頒布した。
- ③文化3（1806）年：伊達（福島）→川連村（秋田県湯沢市）
川連の人間喜内は伊達郡より養蚕教師二人を招き技術の導入改善を図る。また、金易右衛門翁父子は伊達地方におもむき各地の産業を視察し桑苗数百本を購入し同郡二ノ袋村渡辺善十郎・同門人渡辺新之助の兩人を養蚕教師として招き栽桑育蚕繰糸の方法を伝習せしめた（「秋田県文化史年表」）。
- ④文化14年・文政元年（1817-1818）：近江（滋賀）→種子島（鹿児島）
種子島家臣羽生道潔六郎左衛門は、當時藩が招聘していた近江の人松村儀兵衛に傳を受け、文政元年春、種子島に養蚕を創めた。
技術者及び女工を聘し、各郷に伝習せしめた。
- ⑤文政7（1824）年：信濃国（長野）→岡藩・竹田（大分）
江戸滞在中の藩士赤座治郎右衛門は信濃国出身の中条八郎左衛門と親しくなり養蚕導入の協力を求めた。
熊本へ清正公詣にでかけた中条は帰途竹田に立ち寄り、持参した桑苗を渡して養蚕の方法を指導した。
- ⑥文政10（1827）年：上野国佐波郡島村（現群馬県佐波郡境町）→絹村（現栃木県小山市）
文政一〇年（一八二七）、絹村では、宮田国三郎が上野国佐波郡島村（現群馬県佐波郡境町）から桑苗二二〇〇本を買入れ、自ら栽培したばかりでなく、近隣にもその普及を図った。
- ⑦文政12（1829）：宇都宮（栃木）→北魚沼郡小出嶋村（現新潟県魚沼市）
北魚沼郡小出嶋村（小出町）の大黒屋弥七夫婦が、宇都宮で習ってきた製糸業を始めた。
- ⑧嘉永3（1850）年：伊達郡梁川地方、五十川村（現福島県伊達市）→越前国今立郡中村（現福井県）
伊達郡梁川地方、五十川村から越前国今立郡中村へ蚕種が移出（『東北産業経済史』第二巻 米沢藩）。
- ⑨嘉永4（1851）年：甲府（山梨）→大洲藩小田郷（現愛媛県喜多郡内子町）
大洲藩では藩士石河孫左衛門と山本嘉兵衛を甲府へ派遣するや数名の技師を備い、苗1,000本を購入して帰国し、小田郷に植栽した（『愛媛県農業史』）。
- ⑩嘉永の改革・嘉永6（1853）年：米沢藩領勸進代村（山形県米沢）→新庄藩（山形県新庄市周辺）
新庄藩は養蚕奨励で桑の植付け指導のため、米沢藩領勸進代村の遠藤仁右衛門を招く（『増訂最上郡史』）。
- ⑪安政4（1857）年：丹波（京都・兵庫）→小松藩（現愛媛県）
小松藩は、西条絹屋の紹介で丹波から技師二人を招いた（小松藩会所日記）。
- ⑫安政年間（1854-1860）：奥州梁川村（現福島県伊達市）→八尾（現富山県富山市）
奥州梁川村八巻味右衛門（山屋善右衛門）より姫蚕の一種で種ヶ島という品種が八尾に伝来した。
- ⑬万延元（1860）年：上州（現群馬県）→岡谷村（現長野県岡谷市）
諏訪の座繰り器は、万延元年（一八六〇）に岡谷村（岡谷市）の清水久左衛門・林源次郎が、上州から二つ取り器械をそれぞれ二台購入、使用したのが最初といわれている。
- ⑭文久元（1861）年：上州（現群馬県）→埴科郡矢代宿（現長野県千曲市）
埴科郡矢代宿（更埴市）の唐木銀三郎は、文久元年上州群馬郡野良犬村（前橋市）の虎屋善治の代理人に依頼し、数百個の二つ取り器械を製造、導入した。
その使用方法については、埴科郡東船山村桜堂組（更埴市）山崎源蔵の妻茂登が上州出身で二つ取り器械に熟練していたので、まねいて自家の工女に伝習させ、隣村隣郡への普及にも努力したという。
- ⑮文久元（1861）年：上野国吾妻郡（現群馬県）→卯之町（愛媛）
卯之町の事業家清水長十郎は安政頃から蚕業を営み、文久元年には上野国吾妻郡の上田庫之助の指導を受けた（『愛媛県農業史』）。
- ⑯文久2（1862）年：上州前橋（群馬）辺り→八日町（現山梨県甲府市）
甲府の若尾逸平が上州前橋の器械をもとに製糸器械を考案（「若尾逸平君伝」竹内蟬亭編『起業秀才明治百商伝』第二巻）。
- ⑰文久年間（1861-1864）：上州（群馬）→絹村（現栃木県小山市）
絹村の関根民吉は文久年間上州へ赴いて養蚕技術を学び、養蚕家として近隣に名高かった。
- ⑱慶応前後（1865-1868）？：八王子（東京）、上野・下野両国（群馬・栃木）→七重村および同村付近の藤山郷（現北海道函館市周辺、北斗市？）
七重村および同村付の藤山郷には、八王子千人同心の子弟厄介および上野、下野両国から募集した農夫数十戸がいて、いずれもこの業に経験があった。
- ⑲慶応初期（1865）：但馬（兵庫）→鳥取県
当時の国産奉行正牆薫により但馬から桑苗が導入。
- ⑳戊辰の役（1868-1869）：奥州（現東北地方）→三納（現宮崎県西都市）
奥州から連れてこられた松山弥三平は養蚕の技術に長じていたので、領内にその技術を広めようと三納（現西都市）谷照寺に蚕室を設け、付近の婦女子を集めて伝習させた（『佐土原史稿』）。
- ㉑江戸末？明治？ 群馬県多胡郡→埼玉県→上部地方
群馬県多胡郡原産の桑「多胡早生」が埼玉県に。
- ㉒江戸末？明治？ 信州（長野）→埼玉県
信州蚕種が埼玉県に。

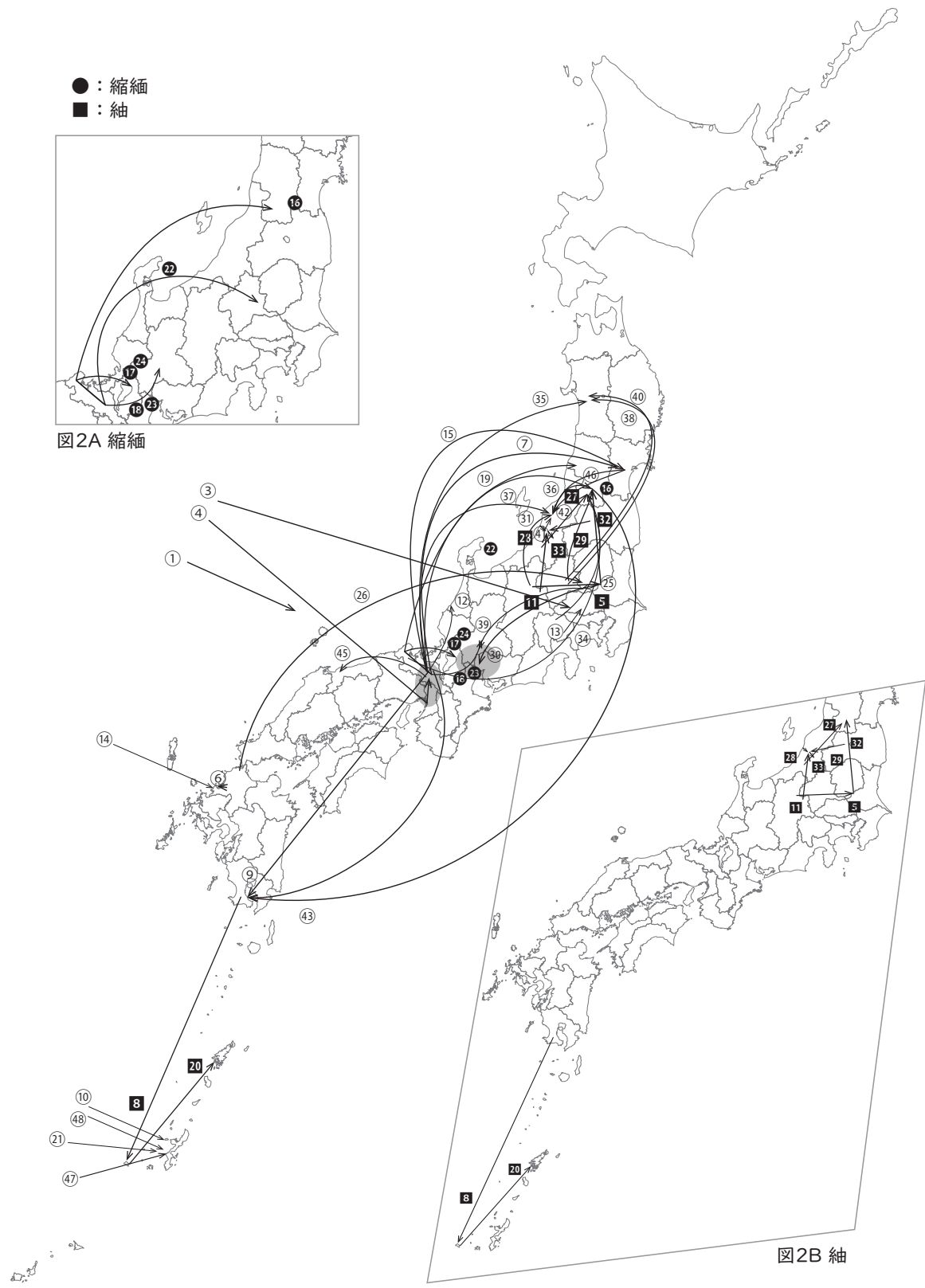


図2 絹織物

絹織物

- ①雄略紀7（463）年？：百済→？
 錦織部：今来漢人と呼ばれた百済系の帰化人、「雄略紀」七年に百済から渡来した「錦部定安郡錦」につながり、錦と綾の製作者。その技術は、綾錦の製作でも経錦の段階であり緯錦には至っていないものとされる。
- ②和銅4～5（711-712）年頃？：？→諸国 ※矢印なし
 和同四年（七一）諸国に挑文師が派遣されて織成技術の伝習が行なわれ、翌年には伊勢や伊予、因幡、伯耆など二一が国で綾・錦（高級織物）が織られるようになった。和銅五年七月には、駿河以西、越前以南、安芸以東、伊予以北の国々で織られるようになった（続日本紀）。
- ③古代（716）以降？：朝鮮半島→高麗郡・小川（埼玉県飯能市・比企郡）
 飯能地方は古代、朝鮮半島からの渡来人が移住して高麗郡を起こし、大陸の技術を通して織物の生産を普及させたと考えられる。江戸時代以降、浮織り、斜子織り、白絹などの織物が生産されている。小川の絹織物も、渡来人である高麗人たちが武蔵国に移住してきて、織物生産の技術を伝えたのが発生であると伝えている。江戸時代以降、紅絹として販路が拡大し生産が盛んになった。
- ④応仁の乱（1467-1478）：明朝（中国）→堺（大阪）など→京都西陣
 大舎人の織手は、応仁の乱の時、乱をさせて堺・大津・奈良などに移住したが、堺などで明朝の工人から技術の伝授をうけ、乱がおさまると、京都にもどり、乱の西陣の陣営となっていた大宮近くに住んで機織をはじめ、西陣機業の根拠地となった（体系日本史叢書『産業史』）。
- ⑤〈紬〉慶長6（1601）年以降：信州上田（長野）→結城地方（茨城）
 慶長六年（一六〇一）結城秀康は越前福井に移封され、翌年伊奈備前守忠次が代官として結城地方を治めた。結城忠次は、この地方に伝わる結城紬改良のため、信州上田から職工を招き染色の改善と柳条の職法を指導させた。
- ⑥長政代・慶長11～元和9（1606-1623）年頃か？：掛町（現博多区下川端町）→博多
 唐織絹：『筑前国統風土記』『土産考』によると福岡藩の初代藩主長政の頃に掛町の彦三郎という唐織の良工から、組細工の家であった竹若家が技術を修得して織りはじめたとされる。
- ⑦元和年中（1615-1623）：京都→仙台藩（宮城）
 元和年中（一六一五～二三）に、仙台藩宿老後藤孫兵衛をして京都から奈良屋岩井氏を召し下した。
- ⑧〈紬〉尚豊（1621-1640）の頃：薩州（鹿児島）→久米島（沖縄）
 尚豊の頃、『球陽』（附巻一）に「十二年平萬社民ニハ丈島ヲ織ルノ法ヲ教フ。薩州人酒匂氏、方ニ国ニイタリ任ヲ受ケ、名ヲ友寄ト改ム（平萬社、名乗ハ景文）此人善クハ丈島ノ織法ヲ知ル王萬社ヲシテ久米島ニ至リ、ハ丈島織ヲ教ヘシム（俗ニ紬ト呼ぶ）」とある。
- ⑨寛永年間（1624-1645）：京都→薩摩藩（鹿児島）
 寛永年間中、藩は京都より中村源左衛門（作左衛門ともあり）を召し下し、織屋を建てさせた。
- ⑩尚質王12（1659）年：閩（現中国福建省）→琉球（沖縄）
 尚質王十二年（一六五九）には浮織の技法も導入されている。すなわち『球陽』（巻之六）に「十二年国吉始メテ浮織綴ヲ織ル。国吉嘗テ貢使に随ヒテ閩ニ入り、始メテ綴疋ヲ織ルノ法ヲ学ビテ回り来リ、（中略）本国浮織コレヨリ始マル」とある。
- ⑪〈紬〉寛文年中（1661-1673）：信州佐久郡望月郷（現長野県佐久市）→栃尾（現新潟県岡市）
 栃尾の絹織物が特産物としての歩みを始める第一歩は、長岡藩の機業奨励策にある。寛文年中（一六六一～七二）に藩が信州佐久郡望月郷から滝沢五兵衛を招き、新たな機業技術の導入を行なったことが領内機業発展のきっかけとなった（『栃尾織物業案内』）。
- ⑫元禄（1688-1704）以降：京都西陣→荻生村（現石川県加賀市）→郡内庄村（現石川県加賀市）
 荻生村の産にして京都西陣に女工たるものありしが、その歸郷するに及び地方の蠶糸を用ひて之が製織に従ひしが、後郡内庄村に嫁したりしに、餅屋彦八といふ者自ら資銀を提供し、村内の婦女をして傳習せしめしかば、製織の業大に隆盛に赴けり。
- ⑬宝永元（1704）年：甲州郡内地方の谷村（現山梨県都留市）→川越（埼玉）
 甲州郡内地方の谷村から秋元但馬守喬知が宝永元年に川越に移封した時、「郡内織」の技術を持込んだといわれる（井上浩「川越絹平と川越唐棧」『埼玉史談』）。
- ⑭不明、宝永6（1709）以前か？：唐船→博多
 貝原益軒の『筑前国統風土記』『土産考』には、博多で生産される織物として「唐織絹」の名をあげ、かつて博多に唐船が来航したおりに技術を学んで織り始めたもの。
- ⑮正徳元年（1711）：京都西陣→仙台国分町（宮城）
 京都西陣の織物師である小松弥右衛門が、正徳元年（一七一一）、仙台国分町の呉服商奈良屋岩井八兵衛の推挙によって伊達家の「御兵具方」として召し抱えられ、同三年「御織物師」となった。
- ⑯〈縮緬〉享保4-5（1719-1720）頃：京都西陣→峰山（京都）→米沢（山形）
 米沢に絹織物の製法を伝えた丹後機業発祥地の峰山一帯。峰山を中心とする絹縮緬は、享保四年、五年（一七一九～二〇）ころに同地の佐平次が、京都西陣からその製法を伝えたものである（『三丹蚕業郷史』）。
- ⑰〈縮緬〉享保5（1720）年：西陣（京都）→丹後・山城（京都）→近江長浜（滋賀）
 享保五年に丹後の絹屋佐佐平治が、苦心さんたんの上、織法を学びとって丹後にその技術を伝え、丹後縮緬進出の足掛りをつくっていた。この丹後が盗み出した西陣の技術は、丹後・山城をとって近江長浜にも移出された。
- ⑱〈縮緬〉享保15（1730）年：京都西陣→岐阜
 岐阜縮緬「美濃ハ丈」。享保十五年（一七三〇）の西陣大火による罹災職人の岐阜などへの移住によって順調な発展をとげ、本場西陣の生産をしだいに圧迫するようになった。
- ⑲享保年間（1716-1736）：京都西陣→鶴岡（山形）
 鶴岡の絹織物製造は、享保年間（一七一九～三五）に藩主の命によって、京都西陣から職人を招いて技術を伝習させたことに始まる。
- ⑳〈紬〉享保（1716-1736）以前：琉球の久米島（沖縄）→大島（鹿児島県奄美大島）
 大島紬の起源は明らかでないが、琉球の久米島紬の製法を傳へたものをいふ。享保五年十月十二日付、大島代官上村半左衛門宛の令達に、與人・横目・目指・筆子・掟以外紬の着用を禁じて居り、同令達は徳之島・喜界島・沖永良部島にも達せられた。
- ㉑尚敬王24（1736）年：閩（現中国福建省）・中国・南方諸国→琉球
 尚敬王二十四年（一七三六）には絹（細）織紗綾の技法も入っている。すなわち『球陽』（巻之十三）に「首里ノ向得礼（天久里之子親雲上朝嘉）ハ技倆衆ニ出ヅ。茲ニ命ゼラレテ閩ニ入り、網緞紗綾等ノ織法ヲ学ビ、（中略）此レヨリ本国織ヲ始ム」とある。このほかにも中国や南方諸国から、いろいろの織物の技法を導入した。
- ㉒〈縮緬〉寛保3（1743）年：西陣（京都）→桐生（群馬）
 寛保三年（一七四三）に、縮緬の生産方法が西陣の職人によって桐生に伝えられた。
- ㉓〈縮緬〉寛延年間（1748-1750）：京都→岐阜
 寛延年間（一七四八～五〇）、岐阜上笹土居町九助が、京都から職人を召し抱え、従来の平縮緬から紋縮緬を織り出すようになった。

絹織物

- ②4 〈縮緬〉宝暦2（1752）年：丹後（京都）→浅井郡難波（滋賀県長浜市）
長浜縮緬は、近江浅井郡難波村の林介と庄九郎が、宮津の種紙商人庄右衛門というのが長浜地方に商いに来訪したとき、丹後縮緬が有利であることをきいて、その技術を導入すべく、二年間丹後に旅して織方を学んで、藩の許可を得て生産を創めたのに由来する。
- ②5 宝暦・18世紀半ば（1751-1764）頃：下総国（栃木・茨城）→館林（群馬）
商品生産としての木綿の栽培が盛んであった館林地方では、18世紀半ばころ（宝暦のころ）に下総国から結城縞の技術を導入。
- ②6 明和・安永の頃1764-1781：筑前小倉（福岡県北九州市小倉）→足利町（栃木県）
足利町の鑊阿寺領の織屋、小佐野茂右衛門が諸国遊歴の途中、筑前小倉で習得した「小倉織」の技術を持ち帰り、足利でその試織に成功し、「足利小倉」の名で織出し、市場の人気を博した。
- ②7 〈紬〉安永5（1776）年：越後頸城郡松之山（現新潟県十日町市）・小千谷（新潟）→米沢藩（山形）
長井紬あるいは米流は米沢藩土上杉治憲（鷹山公）が安永5（1776）年、越後・小千谷から縮師を招き技術導入・職工養成に努められたことによる。
- ②8 〈紬〉寛政（1789-1801）の頃：荷頃村（現新潟県長岡市）→栃堀村（現新潟県長岡市）
天明のころから島紬を始めていた荷頃村（栃尾市）の大崎オヨではじめられた。オヨとは別に縞物の開発に取り組んでいた栃堀村（栃尾市）の島紬は庄屋植村角左衛門は、妻をオヨのもとへ派遣しその技術を学ばせ、さらに改良を加えて寛政のころ栃尾紬の商品化に成功した（『栃尾織物案内』）。
- ②9 〈紬〉寛政期（1789-1801）：会津地方（福島）→栃尾郷（現新潟県長岡市）
寛政期に栃尾郷で織られていた絹織物は、絹・諸紬・絹横紬・惣絹紬の四種類があった。このうち絹は会津方面から取り寄せた良質の蚕尾による繭から引いた糸で織るものである。
- ③0 18世紀末～19世紀：結城（栃木・茨城）→濃尾地方（岐阜南西部・愛知北西部・三重北部）
濃尾地方にも結城縞の技術が伝播し、高機による製織が行われるようになったため、結城のように農家におけるいざり機での生産は押されがちになっていたのである。
- ③1 文化初年（1804）：上州上田（長野）→五泉（新潟）
文化初年、五泉に伝わったものに糸織がある。これは山崎勘七（土深屋）の一族の者が上州から伝えた。その後は信州上田の技法を採り入れた。
- ③2 〈紬〉文化年中（1804-1818）：？（浮浪人）→五十川村（現山形県長井市五十川）、下総結城（茨城）→成田村（現山形県長井市成田）
紬布は真綿を紡いで織ったもので、もともと下長井方面には白紬・縞紬を産していた。たまたま文化年中五十川村の牛沢十助宅に浮浪人が来て、横飛白の製織を伝えた。これが紬紺のはじまりで、その後、白兔村の高橋仁右衛門は縦横の紬紺を製織し、成田村の飯沢半右衛門は、下総結城に赴き紬の製法を学び、これを村々に伝えた。
- ③3 〈紬〉文化文政期（1804-1831）：栃尾（新潟県長岡市）→須原周辺（新潟）
須原周辺では、峠を越えて隣接する紬の本場栃尾から影響を受けて、化政期（一八〇五～二九）から紬生産が展開していた。
- ③4 文化元～文政・天保期？（1804-1844）：丹後（京都）・甲州（山梨）→米沢（山形）
文化元一同四年（一八〇四～〇七）の間と推定。丹後の山家屋清兵衛の周旋によって、宮崎球六を機織の師匠として招いた。彼は丹後縮の機台の模型を本国より取寄せて機械をつくり、その頃、甲州で織っていた諸糸織を改良し、経緯とも絹糸の諸撚を用い、正紺で織り、これを唐糸織と名づけた。
- ③5 文化5～9（1808-1812）年：京都西陣→秋田
職工村上丹八は京都西陣より招聘された。
- ③6 文化初年（1804）：仙台平（宮城）→五泉平（新潟）
仙台（宮城）・米澤（山形）→五泉（新潟）
五泉平は文化初年に仙台平の製法が伝わってから袴地として広く名を知られるようになった。
五泉で織物業を営んでいた宮田平左衛門（美濃屋）に、会津生まれで仙台・米沢などで織物技術を学んだ小林繁八郎が、仙台平の技術を伝えた。
- ③7 文化年間（1804-1817）：京都→加茂（新潟）→五泉（新潟）
加茂では文化年間（一八〇四～一七）に、呉服商松屋・川舟屋が伴って来た京都の職工によって、絹織物の生産が開始された。
その後、職工も五泉へ移ったと伝えられている（『北越機業史』）。
- ③8 文化頃（1804-1817）：上州桐生（群馬）→川尻馬場小路（現秋田県秋田市川尻上野町）
絹織物の品質向上のために技術の導入を計り上州（群馬県）桐生から蓼沼基平を招いた。彼は川尻馬場小路（秋田市川尻町総社前）に居住し染織の業を起し畝織・竜紋織等のほか優雅な八丈を製織した。これが秋田八丈の創始である。
- ③9 文政年間（1818-1831）：下総結城（栃木）→羽栗郡柳津村（現岐阜県岐阜市）
結城縞は、文政年間（一八一八～二九）下総（栃木県）結城の人が、六十六部となって巡国の途次、羽栗郡柳津村の機業の盛況をみて、舶来の細綿糸に、絹糸を交織する結城織を伝えたのがはじめてであるという。
- ④0 天保期（1831-1845）：上州（群馬）→秋田
天保期、上州織師の指導による縞絹、ついで石川滝右衛門の指導による畝織
- ④1 天保12（1841）年頃：見附（新潟）→村松（現新潟県五泉）
村松結城縞：その起源は天保十二（一八四一）年である。村松藩はこの年見附町の機屋山田屋勘右衛門・宮島屋清八の両名を村松結世話方に任命した。かれらは見附から、機具製造職人・機織・染職人を村松に送って生産を開始した。
- ④2 天保13（1842）年：仙台→新津（現新潟県新潟市）
五泉（新潟）・仙台→新津（現新潟県新潟市）
天保十三（一八四二）年に、仙台的機業家下山勘七郎から伝習を受けた同地出身の柴田市次郎が「仙台平」の技術を伝えた。
さらに西山新左衛門は五泉の木谷藤内に師事したのち仙台に向かい、高度な織物技術の習得に当たったと伝えられている（『北越機業史』）。
- ④3 天保（1831-1845）以降？：西陣（京都）・米澤（山形）→薩摩（鹿児島）
織局には西陣より織師を雇ひ、糸も買下した米澤の法を習ひ薩摩御召羽二重なる別種品をも創めたといふ。
- ④4 弘化2（1845）年：？→秋田 ※矢印なし
弘化二年（一八四五）、那波氏の「織物伝習生」の派遣による「亀綾・紹・紗・白縮緬」技術の導入（『那波家機業沿革史』）。
- ④5 嘉永5～安政3（1852-1856）年：先進地帯（京都・大坂・畿内・その他）→鳥取
嘉永六年四月一四日に、国産役所は近江屋忠兵衛・小泉清助の城下町人二人を絹座に指定した（「控帳」）。絹織座も、先進地帯からの技術導入・職工雇傭等に努力したものと推定される。
- ④6 万延元1860：桐生・伊勢崎（群馬）→米沢（山形）
節糸織は、米沢の織物問屋藤倉富蔵の招きで、桐生より移住した田島常右衛門が、万延元年（一八六〇）伊勢崎産を参考にして製造したもの。
- ④7 不明：南方→読谷山（沖縄）
読谷山花織は南方系の織物である。古くから読谷山で織られたためにそのように呼ばれた。読谷山は古くから南方との交流を行った。
- ④8 不明：中国→沖縄
沖縄の浮織は中国伝来の織り方で、高貴の人々が着用した。

● : 綿繰
 ■ : 織

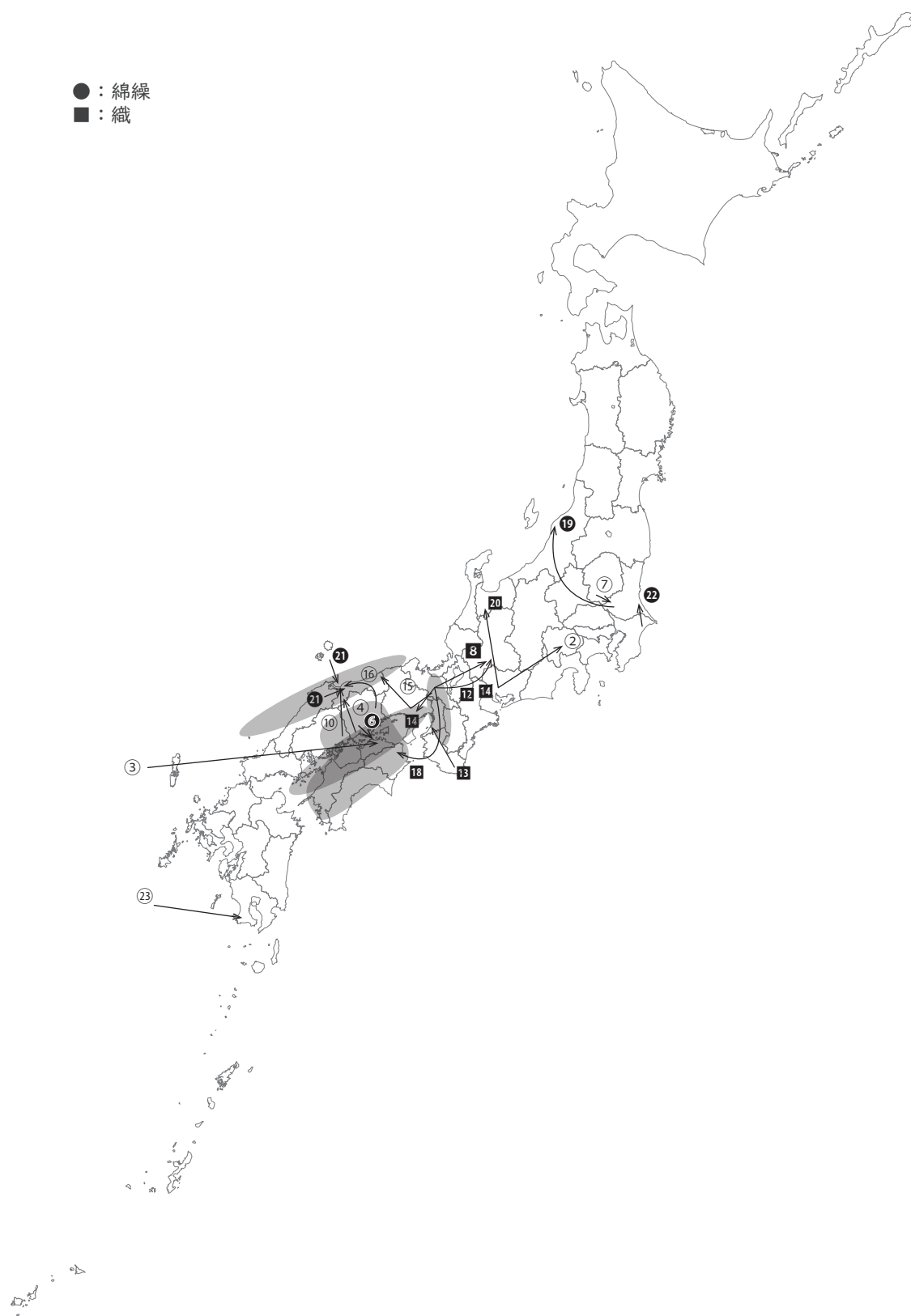


図3 木綿・木綿織

木綿・木綿織

- ❶中世：中央都市→地方都市 ※矢印なし
中央都市の手工業は、律令以来の官工房を中心として製造された。すなわち、織物類・製紙類・各種鋳物類の生産がそれである。地方都市の手工業は、中央よりの技術導入をまって発達した傾向が強い。
- ②室町末期（1550-1570年代）頃？：三河（愛知）方面→東海地方→甲斐国（山梨）
甲斐国の木綿栽培は、三河（愛知県）方面から東海地方を経て東国へと普及する過程で伝来したものと考えられている。
- ③文禄の役（1592-1593）：朝鮮→讃岐（香川）
生駒親正が文禄の役のために朝鮮出兵した際に、讃岐に持ち帰った朝鮮種子が、その後普及していったとしている（『高松市史』）。
- ④延宝4（1676）年：備中玉島（現倉敷市）→弓浜部（現鳥取県米子周辺）
弓浜部の綿作の始まりは、境村小室の新兵衛が、備中の玉島から綿の実を移植したのに始まるという。
- ⑤元禄10（1697）年：大和・河内・紀州方面（奈良・大阪・和歌山・三重）→？ ※矢印なし
綿の栽培について『中国農書』：大和・河内・紀州方面→？
※宮崎安貞（筑前博多藩）『農業全書』の記述についてか？
- ❷宝暦年間（1751-1764）：備中（現岡山県西部）→高松藩（香川）
繰綿増産のために備中より繰子（実綿を繰綿に加工する職人）を招いた（「上書秘記」（『香川県史9近世史料Ⅰ』））。
- ⑦明和6（1769）年：下野国安蘇郡（現栃木県佐野市）→古河（茨城）
古河の木綿屋市郎右衛門後家さち方へ、八名の綿打ち手間取が雇われている。
彼らはいずれも下野国安蘇郡出身のもので、富岡村、藤岡村から三名ずつ、佐野天明村、飯田村から一人ずつきた（『古河市史』資料近世編（町方地方））。
- ❸明和年間（1764-1772）：西陣（京都）→西美濃地方（岐阜）
近世の美濃（主として西濃）を代表する綿織物、棧留縞は明和年間（一七六四―一七一）西陣から伝えられた。
- ❹藩政期中期ころ（1750-1800?）：?→越中（富山） ※矢印なし
綿織物は、藩政期中期ころに越中に伝えられた。
- ⑩明和・安永期（1764-1781）：備後国（広島県東半分）→浜ノ目地域（現鳥取県米子周辺）
浜ノ目地域（弓浜半島）は最初（明和・安永期）は備後国の技術、畑に棉を植えるいわゆる畑棉を導入した。
- ⑪安永9（1780）以降：?→伯耆（現鳥取県中部・西部） ※矢印なし
木綿移出の始まりは、諸説があるが安永9（一七八〇）年ごろ以降のことで、赤崎の商人が三井と紅花の取引きをはじめてのがきっかけとなり、天明年間には、大阪市場に出荷されたことは確かである。
三井の手代らが伯耆（?）に上方向きの木綿生産の技術を指導。
- ❹天明年間（1781-1789）：京都→西美濃地方（岐阜）
近世の美濃（主として西濃）を代表する綿織物、菅大臣縞は天明年間（一七八一―一七八）京都仏光寺通西洞院の菅天神社焼失による附近一帯の職人の移住によってその技術がもたらされた。
- ❺天明期（1781-1789）：紀伊（和歌山）→和泉郡日根郡樽井村（現大阪府泉南市）
天明期（一説に寛延三年、一七五〇）には和泉郡日根郡樽井村の人が、紀伊から紋羽（綿ネルの前身）の織物を伝えたという。
- ❻天明3（1783）年：京都→美濃（岐阜）・播州加古川（兵庫）
天明三年（一七八三）京都に大火があつて、職工（綿織機業者：菅大臣縞）は美濃と播州加古川に移住し、その技術を伝えたという。
- ⑬天明・寛政期（1781-1801）：畿内先進地域→播州（現兵庫県南西部）・その他瀬戸内諸地方→山陰
畿内先進地域の綿作・木綿生産が衰退するのにもなって、播州、その他瀬戸内諸地方を経て、綿作・木綿生産が山陰にまで伝えられた。
- ⑭天明・寛政、天保（1781-1801、1831-1845）：備前・備中・備後（岡山・広島）あるいは四国地方→浜ノ目地域（現鳥取県米子周辺）
浜ノ目地域では天明・寛政・天保期の凶作により種子を失ったが、そのつど備前・備中・備後あるいは四国地方から棉の種を導入して棉作が続けられた。
- ❻寛政期（1789-1801）：加古郡高砂町（現兵庫県高砂市）→八郡郡駒ヶ林村（現兵庫県宝塚市） ※矢印なし
帆木綿は加古郡高砂町の回漕業工業松右衛門（一世）が天明期（一七八一～一七八八）に創製したもので、寛政（一七八九）ははじめに兵庫西郊の八郡郡駒ヶ林村に伝わり、松右衛門帆・兵庫帆として、天保期（一八三〇～一八四三）に盛況をみた。
- ❽文政年間（1818-1831）：京都西陣→川島（徳島）
文政年間川島の布屋中蔵が京都西陣から妻を娶り、その婦人がはじめた神代縞というものに起こるといわれている。
- ⑩文政（1818-1831）頃：結城（茨城県）→村松藩（現新潟県五泉市）
桐油行商人山田屋勘右衛門は行商の途中下総（茨城県）の結城で、各地から大量の木綿系を買い付け、織物生産をしているという状況を見聞し、同地で糸取法を学ぶと同時に「時計車」と称する糸繰車を手に入れ帰町した。
勘右衛門は宮島屋清八とともに綿糸生産を開始し、家中のみならず領内にも広めた。
- ❽文政10（1827）年以降：尾張（愛知）→加賀藩（現富山県砺波郡）
砺波郡福野村源四郎は縮縞の生産をなしてきたが、文政十年（一八二七）より棧留縞の生産を始めた。源四郎は棧留縞の生産販売に有力な後援者として当時加賀藩の産業政策に関係していた御用商人一丸甚六に目をつけ依頼し、一丸甚六は製品の引受を約束し、更に技術伝習のため尾張の熟練者を数名招いた。
- ❹19世紀：隠岐・石見（島根）→米子（鳥取）
米子では隠岐や石見から多数の「綿もりの者」や「綿繰り手伝」を雇い入れた。
- ❽幕末期（1853-1869）頃：総国匠磋郡（千葉）→常陸国矢田部領・新石下村（現茨城県つくば市・常総市）
常陸国矢田部領や、新石下村（石下町）で綿打ちをしていた巳之吉。渡り職人として綿打ちを業とした。
巳之吉：九州の豊前生まれの農民の三男。十七歳のとき、藩に家中のものの供をして江戸に出、下総国匠磋郡で綿打ち渡世のものに弟子入りして業を習った。その後、近隣の農家に婿入りしたり、いったん生国に帰るなどしてから、江戸や下総、常陸国で綿打ち渡世をして暮らしていたという（「近世社会経済編Ⅰ」）。
- ②慶応元（1865）年：イギリス→鹿児島
留学生渡英の際新納久修・五代友厚をして機械購入に当たらしめた。
→慶応2（1866）、司長イー・ホーム及びシリングフォード、サツクリフ、ハリソン等の技師招聘。

● : 亭



図4 麻・麻織物

麻・麻織物

- ①慶長期頃（1596-1615）：村山郡（山形）→置賜地方（山形）
置賜地方の青苧栽培がいつころから始まったのか不明だが、「諸庁根元記」によれば、宮村の青苧下役
菅卯左衛門の先祖が藩から依頼を受け、村山郡から青苧を取り寄せて植え付けたのがその起源とされている。
- ②寛文年間（1661-1673）：明石（兵庫）→小千谷（新潟）
一般的には、この堀次郎将俊は明石の浪人で、寛文年間に何らかの事情で小千谷に来て、在来の白布に改良を加え、
緯糸に強度の撚りをかけて縹ませ、あるいは彩紋を織り出すことに成功した。そして、青苧の績み方、晒方にも
工夫発明をなし、これを村人たちに教えた。もともと明石にゆかりのある何者かが上方の技術を持ち帰り、
これを越後古来の麻布に応用して縮布生産に成功したことは想像に難くない。
- ③安永5（1776）年：越後頸城郡松之山（現新潟県十日町市）・小千谷（新潟）→米沢藩（山形）
安永五年（一七七六）米沢藩士上杉治憲（鷹山公）が越後・小千谷から縮師を招き技術導入・職工養成に努められた。
米沢藩の国家老竹俣当網は、安永五年小千谷地方の縮布製造技術を入ぐるみ導入。
安永五年（一七七六）越後頸城郡松之山の源右衛門一家と男女五人を、苦心の末米沢に招き入れ、
米沢北寺町裏に縮役場を設け、藩営マニュファクチュアのもとに、下級士族の妻女に麻織技術を伝習させた。
- ④文政12（1829）年：奈良→塩屋町・堺町（広島県広島市）
奈良晒風布は奈良地方から産する上質の麻布で、文政十二年城下の塩屋町木地屋彦三郎と堺町油屋庄七が
奈良から製織技術を導入。
- ⑤安政3（1856）年：近江（滋賀）→栗田部（福井県越前市）
栗田部に生まれた重野六十九は同志と図り、近江から蚊帳地織の技術をひそかに取り入れ、
安政三年栗田部に伝習所を設け蚊帳製造を始めた（『今立郡誌』）。

●：藍（染）



図5 藍・紅花・紫根

藍・紅花・紫根

- ①〈染〉天文10（1541）年頃：上方（京都・大阪）→阿波（徳島）
阿波では上方から青屋四郎兵衛、その子太郎右衛門等が来住して、経済的かつ合理的な藍染仕法を伝えて富み栄えた。
- ②〈藍作〉天正13（1585）年：要津飾磨周辺（現姫路）→呉島（現徳島県吉野川市麻植郡鴨島町）
藩祖蓬庵・家政が阿波へ入部。前領地播磨龍野時代から着眼していた要津飾磨周辺の藍を呉島に移植。
- ③〈藍玉〉天明・寛政頃か？（1781-1801）：阿波（徳島）→中瀬河岸（現埼玉県深谷市）
阿波国出身の栗原村（久喜市か）の藤右衛門という紺屋が、中瀬河岸に逗留中に藍葉のねせ方を教え、新方法の藍玉の製造が始まった（近世6）。
- ④〈藍玉〉文化期（1804-1818）：阿波（徳島）→桐町（山形県米沢・置賜周辺）
織物問屋の渡部伊右衛門が阿波国の藍師志摩某に城下桐町に支店を出店させた。
- ⑤〈藍作〉天保5（1834）年：阿波（徳島）→宇和島（愛媛）
宇和島藩谷口文六が四国巡礼中に阿波から種子を持ち帰った。→天保9（1838）年、河野六兵衛が床付けに成功。
- ⑥〈藍作〉天保6（1835）年頃？：阿波（徳島）・大阪→額娃外十九郷（鹿児島県南九州市）
額娃外十九郷に製法の師を阿波・大阪より聘した。
- ⑦〈染〉天保11（1840）年：桐生（群馬）→川井小路（山形県米沢市）
渡部伊右衛門・寒河江佐右衛門・井上甚兵衛・藤倉富蔵などの織物問屋が桐生から染織人高田源兵衛を招き、染屋を城下川井小路に開いた。
- ⑧〈藍作〉安政5（1858）年：仙台（宮城）→箱館（北海道函館）
箱館奉行は仙台から藍作になれた者二名を招いた。
- ⑨〈藍作〉文久（1861-1864）頃？：阿波（徳島）→芦田郡下有地村（現広島県福山市）
芦田郡下有地村（現福山市）生まれの富田久三郎が阿波から葉藍の栽培法を導入し、その普及にもつとめた（『富田翁実歴』）。
- ⑩〈藍作〉時代不明（起源は古い？）：阿波（徳島）→北海道郡下ノ江村（現大分県臼杵市）
北海道郡下ノ江村（臼杵市）の井沢幸兵衛が阿波（徳島県）から種子を持ち帰ったのが初めてとされる。

紅花

- ①寛延（1748-1751）：京都→伯耆（現鳥取県中部・西部）
京都商人若代四郎左衛門に藩（伯耆）が「紅花の作り方、花の仕立」などを領内の百姓に伝授するよう命じた（「在方諸事控」・安藤精一『近世在方商業の研究』）。
- ②天明・寛政（1781-1801）の頃：最上（現山形県村山地方）→江戸（現東京）→足立郡上村（現埼玉県上尾市）
江戸の商人柳屋五郎三郎の召仕太助・半兵衛が足立郡上村の百姓失五郎に最上紅花（山形県）の種を与え栽培させた（『諸問屋再興調』）。
↓
上尾宿・桶川宿付近を中心に自家消費のない完全な商品作物として栽培。

紫根

- ①寛政（1789-1801）の頃：加賀（石川）→博多（福岡）
寛政の頃には加賀から来た染師与右衛門が博多の白水長左衛門、肥後屋新助の両織元に紫根染による紫染の技術を伝えた（帆足小太郎・十時茂『博多織物史』）。



図6 機

機

- ① 応仁・文明の乱（1467-1477）頃：明（中国）→堺（大阪）
 応仁・文明の乱を避けて堺へ移住した織手たちが明の工人による機織を学んだ。
- ② 元文3（1738）年：京都西陣→桐生（群馬）
 上野国の桐生に、京都西陣の織物師が高機による新機織法を伝えた。
 ・野州足利郡下菱村（桐生市）の名主周東平蔵が弥兵衛を招く
 ・桐生新町の絹買商新井（新居）治兵衛が井筒屋吉兵衛を招く
- ③ 元文以降（1741～）：桐生（群馬）→足利（栃木）
 足利への高機の技術の伝来は、桐生を介して行われたものであろう（『足利織物史』『近代足利市史』）。
- ④ 享保～文化（1716-1818）頃か？：姫路（兵庫）→高田藩（現新潟県上越市）→松代地方（長野）
 松代地方では、姫路の機織り具が高田藩士から迎えた嫁を介もたらされる。
- ⑤ 19世紀初期：結城（茨城）→濃尾地方（岐阜・愛知・三重）
 この時期には濃尾地方にも結城縞の技術が伝播し、高機による製織が行われるようになった。
- ⑥ 文化・文政期（1804-1831）：桐生（群馬）→愛甲郡愛川町半原（神奈川）
 愛甲郡愛川町半原では、撚糸を原糸とする博多織の技術と八丁式撚糸器が桐生から導入された。
- ⑦ 文化5（1808）年：野洲（滋賀）→袋津村（現新潟県中蒲原郡亀田町）、葛塚・小須戸（新潟県新潟市）
 植村仁四郎が、野洲から「長機」を伝え、品質の向上を図った（『亀田町史』）。「大和機」と呼ばれていたものであろう。
- ⑧ 文化8（1811）年：三日市（現富山県黒部市）→近隣地域か？
 三日市の島屋清吉などは希望者に機織りの機具を貸与したり、機織りの新興をはかったともいわれ、
 また自ら信州方面へ取引をしたとも伝えられている。
- ⑨ 文政（1818-1831）頃：西陣（京都）→松山城下（愛媛）
 高機は松山城下の菊屋新助が、西陣の絹織物用機織（花機）を取り寄せ、これを木綿織用に改良したもの。
- ⑩ 文政3（1820）年：大和国（奈良）→葛塚（新潟県新潟市）
 当地の新助が大和国で技術を習得したのち帰国し、大和機で木綿縞の製織を開始したという説（『北越機業史』）。
- ⑪ 文政10（1827）年：松山（愛媛）→布喜川村（現愛媛県八幡浜市）
 布喜川村（現八幡浜市）の庄屋摂津八郎が松山から高機を購入し、織女二人も雇って改良に努めた。
- ⑫ 文政10（1827）年：足利（栃木）→村松藩（現新潟県五泉市）
 藩が任命した「高機世話役」の勘右衛門と清八は、文政十年に高機の買入れと技術導入のため足利へ赴いた。
 勘右衛門は足利八日町川島屋嘉吉方のいと、清八は足利元町泉屋栄八の世話でたかという熟練織子を二年契約で雇入れ帰町。
- ⑬ 文政13（1830）年：結城（茨城）→村松藩（現新潟県五泉市）
 文政十三年には清八が結城から男女五人の染織職人を高給で雇うとともに、機具一式を導入した。
- ⑭ 天保年間（1830-1844）：上州桐生（群馬）→元加治村（現埼玉県飯能町）
 元加治村の高機は、上州桐生から導入されたという。
- ⑮ 弘化元（1845）年：伊予国（愛媛）→備後（現広島県東半分）
 久三郎、阿波の人が書き残していった「織絹法」から「浮織」の法を考案し、
 伊予国から伝来していた高機をもって手挽糸で縞木綿を織った。
- ⑯ 弘化年間（1844-1847）：五泉（新潟）→葛塚（新潟県新潟市）
 弘化年間に村山半蔵が五泉から職工を雇って教師とし機屋を開始したのが、
 葛塚縞の始まりであるという説がある（『北越機業史』、『葛塚町沿革』）。
- ⑰ 文久（1861-1864）頃か？：越後（新潟）→横手（秋田）
 横手における縞木綿生産は、越後織工の指導と、これによる数十台の高機の製造・貸与を契機として発展した。
- ⑱ 時代不明（きわめて古い時代に）：松前藩（北海道）→和人（本州）
 機の形式からみて、和人から学んだのではないと思われる。



図7 経

紺

①14～15世紀：中国→沖縄

紺が本格的に沖縄に取り入れられたのは、南方貿易以後と思われる。つまり十四、五世紀の頃、南方系の花織等と一緒に紺が入り、技術を学び、一般にも普及したのである。中国系では紋織の浮織、ろう段織、紹織、紗織、花倉織などがあり、これらは高級の織物であった。そのため、王府から中国へ技術者を派遣し、彼地で技術を習得させ、帰国後技術を伝えた。

②14～16世紀か？：南方諸国→琉球

南方紺が南方貿易を通してその技術が移入されたことについては二つの節がある。

1. 南方諸国の国王から琉球王あてに送られた礼物を通して沖縄に伝わったという説。
このことは琉球の外交関係文書である『歴代宝案』に紺らしいものが礼物の中に含まれていること。
2. 南方諸国に行きついた琉球船の乗組員たちによって直接伝授されたのではないかという説。

③天正年間（1573-1592）：九州飫肥（宮崎）→伊予（愛媛）

伊予結城は天正年間（一五七三～九二）、九州飫肥（宮崎）城主伊東祐丘の夫人が当地に亡命して、つれづれのあまりその女中に織らせ、それを道後で売り出したのが初めてであるという。世にこれを伊予結城・道後縞と称した。

④慶長15（1610）年頃か？：久米島（沖縄）→奄美大島（鹿児島）

鎌倉芳太郎は「紺も沖縄では久米島が最も古く、それがさらに奄美大島に伝えられた」と説き。

⑤寛永14（1637）年：沖縄→薩摩（鹿児島）・久留米（福岡県）

一六三七年（寛永十四）には宮古、八重山に人头税が課された。同様に久米島でも女子に対して人头税としての貢納制度が実施された。王府の御用物産では紬や綿子が管理され、王府御用のほかは中国と薩摩への貢物となった。薩摩や久留米紺もこの貢納布を学んだといわれる。

⑥元文年間（1738）：琉球（沖縄）→薩摩（鹿児島）

琉球紺がいつ頃から始められたか、『沖縄一千年史』に引用された「工芸志料」の中に「元文年間（一七三八）薩摩の織工加須利木綿を製せり。既にして筑後の織工も亦之を織出せり。又下野の結城の織工も柳條木綿を製せり。俱に雅致に富むを以て大に世人の賞讃を博せり。蓋し薩摩加須利（紺）は琉球にて製せしものなり」とある。

⑦宝暦（1751-1764）の頃：越後（新潟県魚沼周辺）→大和（奈良）

大和紺は宝暦のころ葛上郡御所町の浅田五右衛門が、越後上布の紺紺に暗示され、木綿に応用してはじめ、文政年間に御所町の提灯屋峠山佐平が、同町の扇屋和田平兵衛と紺紺の織出しに成功し、世にいう「扇屋紺」「工夫紺」と称するものを創り出したという。

⑧天明年間（1785）頃：薩摩（鹿児島）→久留米（福岡）→大和・伊予（奈良・愛媛）→本州・東北・四国

薩摩紺はさらに久留米にも及んで、天明年間（一七八五年頃）には久留米紺が創始された。それから大和紺、米澤紺、伊予紺と、本州、東北、四国の紺にまで大きな影響を与えた。

⑨文化年中（1804-1818）：？（浮浪人）→五十川村（現山形県長井市五十川） ※矢印なし

紬布は真綿を紡いで織ったもので、もともと下長井方面には白紬・縞紬を産していた。たまたま文化年中五十川村の牛沢十助宅に一浮浪人が来て、横飛白の製織を伝えた。これが紬紺のはじまりで、その後、白兔村の高橋仁右衛門は縦横の紬紺を製織。

⑩文化11（1814）年～：江州（滋賀）→能登（石川）

江州布以上の製織を爲さんと企て、遂に十一年二月茶屋三兵衛を江州に派遣して男工一人・女工二人を招聘し、河合氏の手代三木權右衛門の家を工場に充て、能登部下・徳丸・上三ヶ村の女子十三人を選び、花紺の製織を傳習。

⑪嘉永3（1850）年：信濃国善光寺町（長野）→葛塚（新潟県新潟市）

嘉永三年には信濃国善光寺町（長野市）の竹内幸兵衛が紺の技術を伝えた。幸兵衛は小林嘉六の入婿となって木綿紺を業とし、葛塚縞の商品化を一層進めた。

⑫慶応元（1865）年：先進地域→中河原村（現栃木県小山市） ※矢印なし

慶応元年（一八六五）には問屋が中心となって、紺織の導入に力を入れた結果、中河原村の大塚いさ、須藤うたが紺織に成功した。

⑬不明：琉球→本州・四国→山陰・山陽→北陸・奥州

紺は本州や四国のほか、山陰（広瀬紺）山陽（備後紺）にもおよび、さらに北陸（小千谷紺）奥州（米澤紺）を生むに至った。こうなると琉球紺はたしかに日本の紺織物の元祖といえよう。



図8 山城（特に西陣）・丹後からの移転

山城（特に西陣）・丹後からの移転

- ①〈絹織物④〉応仁の乱（1467-1478）：明朝（中国）→堺（大阪）など→京都西陣
大舎人の織手は、応仁の乱の時、乱をさけて堺・大津・奈良などに移住したが、堺などで明朝の工人から技術の伝授を受け、乱がおさまると、京都にもどり、乱の西陣の陣営となっていた大宮近くに住んで機織をはじめ、西陣機業の根拠地となった。
- ②〈藍①〉天文10（1541）年頃：上方（京都・大阪）→阿波（徳島）
阿波では上方から青屋四郎兵衛、その子太郎右衛門等が来住して、経済的かつ合理的な藍染仕法を伝えて富み栄えた。
- ③〈絹織物⑦〉元和年中（1615-1623）：京都→仙台藩（宮城）
元和年中（一六一五-二三）に、仙台藩宿老後藤孫兵衛をして京都から奈良屋岩井氏を召し下した。
- ④〈絹織物⑨〉寛永年間（1624-1645）：京都→薩摩藩（鹿児島）
寛永年間中、藩は京都より中村源左衛門（作左衛門ともあり）を召し下し、織屋を建てさせた。
- ⑤〈絹織物⑫〉元禄（1688-1704）以降：京都西陣→荻生村（現石川県加賀市）→郡内庄村（現石川県加賀市）
荻生村の産にして京都西陣に女工たるものありしが、その歸郷するに及び地方の蠶糸を用ひて之が製織に従ひしが、後郡内庄村に嫁したりしに、餅屋彦八といふ者自ら資銀を提供し、村内の婦女をして傳習せしめしかば、製織の業大に隆盛に赴けり。
- ⑥〈養蚕・製糸⑨〉元禄（1688-1704）頃か？：京都→仙台藩（現宮城県）
「勤功録」を検討すると、初めは京阪地方の生糸を輸入して織り方を行っていた。これは、小松家弥右衛門をはじめその弟子たちはほとんど京西陣より呼び下されて勤仕したがため、勿論東北の生糸は京阪地方の物より質が劣っていた理由にもよるであろう。
- ⑦〈表⑭〉18世紀以前か？：京都→琉球（沖縄）
紅型は、南蛮の斑繪斑綿布の影響を推定した。それに「きやう型」（京型）の技術を加え、更に本土から型紙を取寄せて「かたつき」（糊置型染）を開始し、十八世紀に入って琉球の画家に図案を描かせ、独創的な型紙による「紅型」が大成された、と考えた。
- ⑧〈絹織物⑮〉正徳元年（1711）：京都西陣→仙台国分町（宮城）
京都西陣の織物師である小松弥右衛門が、正徳元年（一七一））、仙台国分町の呉服商奈良屋岩井八兵衛の推挙によつて伊達家の「御兵具方」として召し抱えられ、同三年「御織物師」となった。
- ⑨〈表⑮〉享保期（1716-1736）：京都→桐生（群馬）
京都との人の往来に伴って、京都から種々の先進技術が伝来した。とりわけ享保期にかけては、染色・仕上工程の技術が導入された。享保八、九年ごろ京都の張屋久兵衛が「白張法」を桐生に伝え、その後「赤染法」も京都の職人によってこの地にもたらされた。
- ⑩〈絹織物⑯〉享保4-5（1719-1720）頃：京都西陣→峰山（京都）→米沢（山形）
米沢に絹織物の製法を伝えた丹後機業発祥地の峰山一帯。峰山を中心とする絹縮緬は、享保四年、五年（一七一九-二〇）ころに同地の佐平次が、京都西陣からその製法を伝えたものである（『三丹産業郷史』）。
- ⑪〈絹織物⑰〉享保5（1720）年：西陣（京都）→丹後・山城（京都）→近江長浜（滋賀）
享保五年に丹後の絹屋佐平治が、苦心さんたんの上、織法を学びとつて丹後にその技術を伝え、丹後縮緬進出の足掛りをつくっていた。この丹後が盗み出した西陣の技術は、丹後・山城をとんで近江長浜にも移出された。
- ⑫〈絹織物⑱〉享保15（1730）年：京都西陣→岐阜
岐阜縮緬「美濃八丈」。享保十五年（一七三〇）の西陣大火による罹災職人の岐阜などへの移住によって美濃の絹織物生産は順調な発展をとげ、本場西陣の生産をしだいに圧迫するようになった。
- ⑬〈絹織物⑲〉享保年間（1716-1735）：京都西陣→鶴岡（山形）
鶴岡の絹織物製造は、享保年間（一七一九-三五）に藩主の命によって、京都西陣から職人を招いて技術を伝習させたことに始まる。
- ⑭〈機②〉元文3（1738）年：京都西陣→桐生（群馬）
上野国の桐生に、京都西陣の織物師が高機による新機織法を伝えた。
・野州足利郡下菱村（桐生市）の名主周東平蔵が弥兵衛を招く
・桐生新町の絹買商新井（新居）治兵衛が井筒屋吉兵衛を招く
- ⑮〈絹織物⑳〉寛保3（1743）年：西陣（京都）→桐生（群馬）
寛保三年（一七四三）に、縮緬の生産方法が西陣の職人によって桐生に伝えられた。
- ⑯〈紅花①〉寛延（1748-1751）：京都→伯耆（現鳥取県中部・西部）
京都商人若代四郎左衛門に藩（伯耆）が「紅花の作り方、花の仕立」などを領内の百姓に伝授するよう命じた（「在方諸事控」・安藤精一『近世在方商業の研究』）。

山城（特に西陣）・丹後からの移転

- ⑪ 〈絹織物③〉寛延年間（1748-1750）：京都→岐阜
寛延年間（一七四八―一〇）、岐阜上笹土居町九助が、京都から職人を召し抱え、従来の平縮緬から紋縮緬を織り出すようになった。
- ⑫ 〈絹織物④〉宝暦2（1752）年：丹後（京都）→浅井郡難波（滋賀県長浜市）
長浜縮緬は、近江浅井郡難波村の林介と庄九郎が、宮津の種紙商人庄右衛門というのが長浜地方に商いに来訪したとき、丹後縮緬が有利であることをきいて、その技術を導入すべく、二年間丹後に旅して織方を学んで、藩の許可を得て生産を創めたのに由来する。
- ⑬ 〈木綿・木綿織③〉明和年間（1764-1771）：西陣（京都）→西美濃地方（岐阜）
近世の美濃（主として西濃）を代表する綿織物、棧留縞は明和年間（一七六四―七一）西陣から伝えられた。
- ⑭ 〈木綿・木綿織⑫〉天明年間（1781-1788）：京都→西美濃地方（岐阜）
近世の美濃（主として西濃）を代表する綿織物、菅大臣縞は天明年間（一七八一―八八）京都仏光寺通西洞院の菅天神社焼失による附近一帯の職人の移住によってその技術がもたらされた。
- ⑮ 〈木綿・木綿織⑭〉天明3（1783）年：京都→美濃（岐阜）・播州加古川（兵庫）
天明三年（一七八三）京都に大火があつて、職工（綿織機業者：菅大臣縞）は美濃と播州加古川に移住し、その技術を伝えたという。
- ⑯ 〈木綿・木綿織⑮〉天明・寛政期（1781-1801）：畿内先進地域→播州（現兵庫県南西部）・その他瀬戸内諸地方→山陰
畿内先進地域の綿作・木綿生産が衰退するのにもなって、播州、その他瀬戸内諸地方を経て、綿作・木綿生産が山陰にまで伝えられた。
- ⑰ 〈表⑨〉寛政期（1789-1801）：京都→多可郡比延庄村（現兵庫県西脇市比延町）
寛政期に大工飛田安兵衛が京都勘大寺付近の先染織物の技術を伝えた。のちには染物職人の招聘に成功した。
- ⑱ 〈養蚕・製糸⑳〉寛政9（1797）年頃：陸奥国福島（福島県福島市）→丹後国：竹野郡芋野村（京都府竹野郡弥栄町）
但馬国：久美浜村（京都府熊野郡久美浜町）
最上といわれる陸奥国福島（福島県福島市）の蚕種を取り寄せ、丹後国は竹野郡芋野村（京都府竹野郡弥栄町）孫左衛門、但馬国は久美浜村（京都府熊野郡久美浜町）雄次の世話で領内に配付することを決め、技術上の指導を行なった。
- ㉑ 〈養蚕・製糸㉑〉寛政10（1798）年頃：丹波（京都・兵庫）→置賜地方（山形）
米沢で夏蚕（丹波蜜）は丹波からはいったものと思われる。
- ㉒ 〈絹織物㉒〉文化元～文政・天保期？（1804-1844）：丹後（京都）・甲州（山梨）→米沢（山形）
文化元一同四年（一八〇四―〇七）の間と推定。丹後の山家屋清兵衛の周旋によって、宮崎球六を機織の師匠として招いた。彼は丹後縮の機台の模型を本国より取寄せて機械をつくり、その頃、甲州で織っていた諸系織を改良し、経緯とも絹糸の諸撚を用い、正紺で織り、これを唐系織と名づけた。
- ㉓ 〈絹織物㉓〉文化5～9（1808-1812）：京都西陣→秋田
職工村上丹八は京都西陣より招聘された。
- ㉔ 〈絹織物㉔〉文化年間（1804-1817）：京都→加茂（新潟）→五泉（新潟）
加茂では文化年間（一八〇四―一七）に、呉服商松屋・川舟屋が伴って来た京都の職工によって、絹織物の生産が開始された。その後、職工も五泉へ移ったと伝えられている（『北越機業史』）。
- ㉕ 〈木綿・木綿織⑮〉文政年間（1818-1831）：京都西陣→川島（徳島）
文政年間川島の布屋中蔵が京都西陣から妻を娶り、その婦人がはじめた神代縞というものに起こるといわれている。
- ㉖ 〈機⑨〉文政（1818-1831）頃：西陣（京都）→松山城下（愛媛）
高機は松山城下の菊屋新助が、西陣の絹織物用織機（花機）を取り寄せ、これを木綿織用に改良したもの。
- ㉗ 〈絹織物④③〉天保（1831-1845）以降？：西陣（京都）・米澤（山形）→薩摩（鹿児島）
織局には西陣より織師を雇ひ、糸も買下した米澤の法を習ひ薩摩御召羽二重なる別種品をも創めたといふ。
- ㉘ 〈絹織物④⑤〉嘉永5～安政3（1852-1856）年：先進地帯（京都・大坂・畿内・その他）→鳥取
嘉永六年四月一四日に、国産役所は近江屋忠兵衛・小泉清助の城下町人二人を絹座に指定した（「控帳」）。絹織座も、先進地帯からの技術導入・職工雇傭等に努力したものと推定される。
- ㉙ 〈養蚕・製糸㉙〉安政4（1857）年：丹波（京都・兵庫）→小松藩（現愛媛県）
小松藩は、西条絹屋の紹介で丹波から技師二人を招いた（『小松藩会所日記』）。

図の出典情報

地図		出典				時代		
種類	番号	書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦（年）	西暦（年）	区分
養蚕・製糸 (図1)	①	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	476	476	15世紀中頃	1450	江戸前
		沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	487	488			
		沖縄県史 第22巻 各論編10 民俗 1	昭和47	130	130			
		沖縄県史 第22巻 各論編10 民俗 1	昭和47	421	421			
	②	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和56	154	154	永禄年間	1558-1570	江戸前
	③	福島県史（近世 1）	昭和46	178	178	天正以前	1573-1593	江戸前
	④	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和58	108	110	天正6	1578	江戸前
	⑤	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和58	148	148	慶長年間	1596-1615	江戸 I
	⑥	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	478	478	尚寧31 万暦47 天和5	1619	江戸 I
		沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	487	488			
		沖縄県史 第22巻 各論編10 民俗 1	昭和47	130	130			
	⑦	新潟県史 通史編 4 近世 2	昭和63	474	474	寛文～元禄期？	1661-1704	江戸Ⅱ
	⑧	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和58	154	154	貞享・元禄年間	1684-1704	江戸Ⅱ
		富山県史 民俗編	昭和48	411	411			
	⑨	宮城県史 9（産業 I）	昭和43	769	769	元禄頃か？	1688-1704	江戸Ⅱ
	⑩	岩手県史 第十一巻 民俗篇	昭和40	239	241	享保の中頃	1716-1736	江戸Ⅳ
	⑪	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和58	133	133	宝暦年間以後？	1751-1764	江戸Ⅳ
	⑫	秋田県史第三巻 近世編 下	昭和40	311	311	安永3	1774	江戸Ⅴ
		山形県史本編 6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	595	597			
		山形県史本編 6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	609	611			
		山形県史本編 6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	612	613			
	⑬	秋田県史第三巻 近世編 下	昭和40	311	312	安永9	1780	江戸Ⅴ
	⑭	新潟県史 通史編 7 近代 2	昭和63	262	262	天明4	1784	江戸Ⅴ
	⑮	山形県史第四巻（近現代編上）	昭和59	484	486	寛政年間以前	1789-1801	江戸Ⅴ
	⑯	愛媛県史 近世下	昭和62	90	91	寛政期	1789-1801	江戸Ⅴ
	⑰	秋田県史 民俗工芸編	昭和37	269	269	寛政期	1789-1801	江戸Ⅴ
	⑱	山形県史第三巻 近世下	昭和62	495	501	寛政4頃	1792	江戸Ⅴ
	⑲	兵庫県史 第 5 巻	昭和50	12	12	寛政9	1797	江戸Ⅴ
	⑳	兵庫県史 第 5 巻	昭和50	11	12	寛政9頃	1797	江戸Ⅴ
	㉑	山形県史本編 6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	602	604	寛政10頃	1798	江戸Ⅴ
	㉒	神奈川県史通史編3近世（2）	昭和58	530	531	文化2	1805	江戸Ⅵ
	㉓	秋田県史第三巻 近世編 下	昭和40	300	300	文化3	1806	江戸Ⅵ
		秋田県史 民俗工芸編	昭和37	271	272			
	㉔	鹿児島県史 第二巻	昭和15	516	517	文化14・文政元	1817-1818	江戸Ⅵ
	㉕	大分県史 近世篇Ⅳ	平成 2	245	246	文政7	1824	江戸Ⅵ
	㉖	茨城県史＝市町村編Ⅱ	昭和60	98	98	文政10	1827	江戸Ⅵ
	㉗	新潟県史 通史編 7 近代 2	昭和63	256	256	文政12	1829	江戸Ⅵ
	㉘	山形県史本編 6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	623	625	嘉永3	1850	江戸Ⅶ
	㉙	愛媛県史 近世下	昭和62	90	91	嘉永4	1851	江戸Ⅶ
	㉚	山形県史第三巻 近世下	昭和62	518	521	嘉永6	1853	江戸Ⅵ
	㉛	愛媛県史 近世下	昭和62	90	91	安政4	1857	江戸Ⅶ
	㉜	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和58	156	156	安政年間	1854-1860	江戸Ⅶ
富山県史 民俗編		昭和48	405	405				
富山県史 民俗編		昭和48	412	412				
㉝	長野県史 通史編 第六巻近世三	平成元	726	726	万延元	1860	江戸Ⅶ	
㉞	長野県史 通史編 第六巻近世三	平成元	725	725	文久元	1861	江戸Ⅶ	
㉟	愛媛県史 近世下	昭和62	90	91	文久元	1861	江戸Ⅶ	
㊱	山梨県史 通史編 4 近世 2	平成19	800	801	文久2	1862	江戸Ⅶ	
㊲	茨城県史＝市町村編Ⅱ	昭和60	98	98	文久年間	1861-1864	江戸Ⅶ	
㊳	新北海道史 第二巻 通説一	昭和45	862	862	慶応前後？	1865-1868	江戸Ⅶ	
㊴	鳥取県史 近代 第三巻 経済篇	昭和44	160	160	慶応初期	1865	江戸Ⅶ	
㊵	宮崎県史 資料編 民俗 1	平成 4	914	914	戊辰の役	1868-1869	江戸Ⅶ	
㊶	新編埼玉県史 別編1 民俗1	昭和63	417	430	江戸末？明治？		不明	
㊷	新編埼玉県史 別編1 民俗1	昭和63	417	430	江戸末？明治？		不明	

地図		出典				時代		
種類	番号	書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦（年）	西暦（年）	区分
絹織物 (図2)	①	鳥取県史 第1巻 原始古代	昭和47	362	362	雄略紀7?	463	江戸前
	②	三重県史 通史編 原始・古代	昭和28	428	428	和銅4	711	江戸前
		愛媛県 古代Ⅱ・中世	昭和59	120	120	和銅4	711	江戸前
		広島県史 原始 古代 通史Ⅰ	昭和55	602	603	和銅5	712	江戸前
		鳥取県史 第1巻 原始古代	昭和47	546	546	和銅5	712	江戸前
	③	新編埼玉県史 別編Ⅰ 民俗Ⅰ	昭和63	506	507	古代以降?	716	江戸前
	④	鳥取県史 第2巻 中世	昭和48	380	380	応仁の乱	1467-1478	江戸前
	⑤紬	茨城県史＝市町村編Ⅱ	昭和50	99	100	慶長6以降	1601	江戸Ⅰ
	⑥	福岡県史 通史編福岡藩（二）	平成14	410	411	長政代	1606-1623	江戸Ⅰ
		福岡県史 通史編福岡藩文化下	平成6	594	594	慶長11-元和9頃か?		
	⑦	宮城県史9（産業Ⅰ）	昭和43	756	757	元和年中	1615-1623	江戸Ⅰ
	⑧紬	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	478	479	尚豊の頃	1621-1640	江戸Ⅰ
	⑨	鹿児島県史 第二巻	昭和15	517	518	寛永年間	1624-1645	江戸Ⅰ
	⑩	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	479	479	尚質王十二年	1659	江戸Ⅱ
	⑪紬	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	474	474	寛文年中	1661-1673	江戸Ⅱ
	⑫	石川県史3	昭和49	925	925	元禄以降	1688-1704	江戸Ⅱ
	⑬	新編埼玉県史通史編4近世2	平成元	404	404	宝永元年	1704	江戸Ⅲ
	⑭	福岡県史 通史編福岡藩文化下	平成6	593	593	不明、宝永6以前か?	1709	江戸Ⅲ
	⑮	宮城県史9（産業Ⅰ）	昭和48	756	757	正徳元	1711	江戸Ⅲ
		宮城県史2（近世史）	昭和41	515	516			
	⑯縮緬	山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	588	588	享保4-5頃	1719-1720	江戸Ⅳ
	⑰縮緬	京都の歴史6 伝統の定着	昭和48	212	213	享保5	1720	江戸Ⅳ
	⑱縮緬	岐阜県史 通史編 近世 下	昭和47	10	11	享保15	1730	江戸Ⅳ
	⑲	山形県史第四巻（近現代編上）	昭和59	514	514	享保年間	1716-1736	江戸Ⅳ
	⑳紬	鹿児島県史 第二巻	昭和15	519	519	享保以前	1716-1736	江戸Ⅳ
	㉑	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	479	479	尚敬王25	1736	江戸Ⅳ
	㉒縮緬	群馬県史通史編5近世2	平成3	283	283	寛保3	1743	江戸Ⅳ
	㉓縮緬	岐阜県史 通史編 近世 下	昭和47	447	447	寛延年間	1748-1750	江戸Ⅳ
	㉔縮緬	滋賀県史 昭和編 第四巻商工編	昭和55	306	306	宝暦2	1752	江戸Ⅳ
		京都の歴史6 伝統の定着	昭和48	241	241	宝暦2	1752	江戸Ⅳ
	㉕	群馬県史通史編5近世2	平成3	41	41	江戸中期ころ	18世紀半ば	江戸Ⅳ
		群馬県史通史編5近世2	平成3	264	264	宝暦のころ	1751-1764	江戸Ⅳ
	㉖	栃木県史通史編5近世二	昭和59	8	8	明和・安永の頃	1764-1781	江戸Ⅴ
	㉗紬	山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	586	587	安永5	1776	江戸Ⅴ
		山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	598	599			
	㉘紬	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	475	475	寛政の頃	1789-1801	江戸Ⅴ
	㉙紬	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	476	477	寛政期	1789-1801	江戸Ⅴ
	㉚	茨城県史＝近世編	昭和60	383	383		18世紀末～19世紀	江戸Ⅴ
	㉛	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	472	473	文化初年	1804	江戸Ⅵ
	㉜紬	山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	600	601	文化年中	1804-1818	江戸Ⅵ
	㉝紬	新潟県史 通史編5 近世3	昭和63	339	340	文化文政期	1804-1831	江戸Ⅵ
	㉞	山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	599	600	文化元～文政・天保期?	1804-1844	江戸Ⅵ
	㉟	秋田県史 民俗工芸編	昭和37	273	273	文化5～9	1808-1812	江戸Ⅵ
	㊱	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	453	453	文化初期	1804	江戸Ⅵ
		新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	472	472			
	㊲	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	472	472	文化年間	1804-1817	江戸Ⅵ
	㊳	秋田県史 民俗工芸編	昭和37	273	273	文化頃	1804-1817	江戸Ⅵ
	㊴	岐阜県史 通史編 近世 下	昭和47	459	459	文政年間	1818-1831	江戸Ⅵ
	㊵	秋田県史第三巻 近世編 下	昭和40	318	319	天保期	1831-1845	江戸Ⅶ
	㊶	新潟県史 通史編5 近世3	昭和63	325	325	天保12頃	1841	江戸Ⅶ
	㊷	新潟県史 通史編4 近世2	昭和63	472	472	天保13	1842	江戸Ⅶ
	㊸	鹿児島県史 第二巻	昭和15	517	518	天保以降?	1831-1845	江戸Ⅶ
	㊹	秋田県史第三巻 近世編 下	昭和40	319	319	弘化2	1845	江戸Ⅶ
	㊺	鳥取県史 第5巻 近世 文化産業	昭和57	604	605	嘉永5～安政3	1852-1856	江戸Ⅶ
	㊻	山形県史第四巻（近現代編上）	昭和59	510	512	万延元	1860	江戸Ⅷ
	㊼	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	489	489	不明	不明	不明
	㊽	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	489	490	不明	不明	不明

地図		出典				時代		
種類	番号	書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦（年）	西暦（年）	区分
木綿・木綿織 (図3)	❶	鳥取県史 第2巻 中世	昭和48	379	379	中世		江戸前
	❷	山梨県史 通史編3 近世1	平成18	511	512	室町末期頃？	1550-1570年代	江戸前
	❸	香川県史 第四巻通史編 近世Ⅱ	平成元	21	22	文禄の役	1592-1593	江戸前
	❹	鳥取県史 近代 第三巻 経済篇	昭和44	146	146	延宝4	1676	江戸Ⅱ
	❺	福岡県史 通史編福岡藩文化上	平成5	404	404	元禄10	1697	江戸Ⅱ
	❻	香川県史 第四巻通史編 近世Ⅱ	平成元	22	23	宝暦年間	1751-1764	江戸Ⅳ
	❼	茨城県史＝近世編	昭和60	379	379	明和6	1769	江戸Ⅳ
	❽	岐阜県史 通史編 近世 下	昭和47	11	11	明和年間	1764-1772	江戸Ⅳ
	❾	富山県史 通史編Ⅴ 近代 上	昭和56	233	234	藩政期中期ころ	1750-1800？	江戸Ⅴ
	❿	鳥取県史 第5巻 近世 文化産業	昭和57	542	543	明和・安永期	1764-1781	江戸Ⅴ
	⓫	鳥取県史 近代 第三巻 経済篇	昭和44	454	454	安永頃9以降？	1780	江戸Ⅴ
	⓬	岐阜県史 通史編 近世 下	昭和47	11	11	天明年間	1781-1789	江戸Ⅴ
	⓭	大阪府史 第6巻 近世編Ⅱ	昭和62	412	412	天明期	1781-1789	江戸Ⅴ
	⓮	岐阜県史 通史編 近世 下	昭和47	459	459	天明3	1783	江戸Ⅴ
	⓯	鳥取県史 第3巻 近世 政治	昭和54	438	438	天明・寛政期	1781-1801	江戸Ⅴ
	⓰	鳥取県史 第5巻 近世 文化産業	昭和57	542	543	天明・寛政、天保	1781-1801, 1831-1845	江戸Ⅴ
	⓱	兵庫県百年史	昭和42	200	200	寛政期	1789-1801	江戸Ⅴ
	⓲	徳島県史 第五巻	昭和41	415	415	文政年間	1818-1831	江戸Ⅵ
	⓳	新潟県史 通史編5 近世3	昭和63	326	326	文政頃	1818-1831	江戸Ⅵ
	⓴	富山県史 通史編Ⅳ近世下	昭和58	142	143	文政10以降	1827	江戸Ⅵ
	⓵	鳥取県史 第4巻 近世 社会経済	昭和56	246	246	19世紀	1801-1900	江戸Ⅶ
	⓶	茨城県史＝近世編	昭和60	379	379	幕末期頃	1853-1869	江戸Ⅷ
	⓷	鹿児島県史第三巻	昭和16	74	75	慶応元	1865	江戸Ⅷ
麻・麻織物 (図4)	❶	山形県史第二巻 近世上	昭和60	782	784	慶長期頃	1596-1615	江戸Ⅰ
	❷	新潟県史 通史編3 近世1	昭和62	500	501	寛文年間	1661-1673	江戸Ⅱ
	❸	山形県史本編5（商工業編）	昭和50	406	410	安永5	1776	江戸Ⅳ
		山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	586	587			
		山形県史本編6（漁業・畜産、蚕糸・林業編）	昭和50	598	599			
	❹	広島県史 近世2 通史Ⅳ	昭和59	385	385	文政12	1829	江戸Ⅵ
	❺	福井県史 通史編4 近世2	平成8	317	317	安政3	1856	江戸Ⅶ
藍 (図5)	❶染	徳島県史 第四巻	昭和40	194	195	天文10頃	1541	江戸前
	❷藍作					天正13	1585	江戸前
	❸藍作	新編埼玉県史通史編4 近世2	平成元	427	428	天明・寛政頃か？	1781-1801	江戸Ⅴ
	❹藍作	山形県史第三巻 近世下	昭和62	507	507	文化期	1804-1818	江戸Ⅵ
	❺藍作	愛媛県史 近世下	昭和62	662	662	天保5	1834	江戸Ⅶ
		愛媛県史 社会経済3 商工	昭和61	244	244			
	❻藍作	鹿児島県史 第二巻	昭和15	523	523	天保6頃？	1835	江戸Ⅶ
	❼染	山形県史第三巻 近世下	昭和62	507	507	天保11	1840	江戸Ⅶ
	❽藍作	新北海道史 第二巻 通説一	昭和45	860	860	安政5	1858	江戸Ⅶ
	❾藍作	広島県史 近世2 通史Ⅳ	昭和59	421	421	文久頃？	1861-1864	江戸Ⅷ
	❿藍作	大分県史 近代篇Ⅱ	昭和61	220	220	時代不明 (起源は古い？)		不明
紅花 (図5)	❶	鳥取県史 第4巻 近世 社会経済	昭和61	643	643	寛延期	1748-1751	江戸Ⅳ
	❷	新編埼玉県史通史編4近世2	平成元	426	426	天明・寛政の頃	1781-1801	江戸Ⅴ
紫根 (図5)	❶	福岡県史 通史編福岡藩文化下	平成6	603	603	寛政の頃	1789-1801	江戸Ⅴ

地図		出典				時代		
種類	番号	書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦（年）	西暦（年）	区分
機 (図6)	①	京都の歴史 4 桃山の開花	昭和44	423	423	応仁・文明の乱頃	1467-1477	江戸前
	②	栃木県史通史編4近世一	昭和56	731	731	元文3	1738	江戸Ⅳ
		栃木県史通史編4近世一	昭和56	735	735			
		群馬県史通史編5近世2	平成3	37	37			
		群馬県史通史編5近世2	平成3	272	272			
		群馬県史通史編5近世2	平成3	279	281			
		京都の歴史 6 伝統の定着	昭和48	213	213			
	③	栃木県史通史編5近世二	昭和59	8	8	元文以降	1741	江戸Ⅳ
	④	長野県史 通史編 第五巻近世二	昭和63	356	356	享保～文化頃か？	1716-1818	江戸Ⅴ
	⑤	茨城県史＝近世編	昭和60	383	383		19世紀初頭	江戸Ⅵ
	⑥	神奈川県史通史編6近代・現代（3）	昭和56	417	418	文化・文政期	1804-1831	江戸Ⅵ
	⑦	新潟県史 通史編 5 近世 3	昭和63	322	322	文化5	1808	江戸Ⅵ
	⑧	富山県史 民俗編	昭和48	418	419	文化8	1811	江戸Ⅵ
	⑨	愛媛県史 近世上	昭和61	250	250	文政頃	1818-1831	江戸Ⅵ
		愛媛県史 近世下	昭和62	143	143			
	⑩	新潟県史 通史編 5 近世 3	昭和63	322	323	文政3	1820	江戸Ⅵ
	⑪	愛媛県史 近世下	昭和62	146	147	文政10	1827	江戸Ⅵ
		愛媛県史 社会経済 3 商工	昭和61	244	244			
	⑫	新潟県史 通史編 5 近世 3	昭和63	327	327	文政10	1827	江戸Ⅵ
	⑬					文政13	1830	江戸Ⅵ
耕 (図7)	⑭	新編埼玉県史通史編5近代1	昭和63	460	460	天保年間	1830-1844	江戸Ⅶ
	⑮	広島県史 近代 1 通史Ⅴ	昭和55	841	841	弘化元	1845	江戸Ⅶ
		広島県史 近世 2 通史Ⅳ	昭和59	420	421			
	⑯	新潟県史 通史編 5 近世 3	昭和63	322	323	弘化年間	1844-1847	江戸Ⅶ
	⑰	秋田県史第三巻 近世編 下	昭和40	329	329	文久頃か？	1861-1864	江戸Ⅷ
	⑱	新北海道史 第二巻 通説一	昭和45	44	44	時代不明 (きわめて古い時代)		不明
	①	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	476	476		14～15世紀	江戸前
	②	沖縄県史 第22巻 各論編10 民俗 1	昭和47	414	414		14～16世紀か？	江戸前
	③	愛媛県史 社会経済 3 商工	昭和61	180	180	天正年間	1573-1592	江戸前
	④	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	488	488	慶長15頃か？	1610	江戸Ⅰ
	⑤	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	488	488	寛永14	1637	江戸Ⅰ
	⑥	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	477	478	元文年間	1738	江戸Ⅳ
	⑦	奈良県史 第十二巻 民俗（上）—大和の伝承文化	昭和61	113	114	宝暦の頃	1751-1764	江戸Ⅴ
	⑧	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	477	478	天明年間頃	1785	江戸Ⅴ
	⑨	山形県史第四巻（近現代編上）	昭和59	513	514	文化年中	1804-1818	江戸Ⅵ
		山形県史本編 6（漁業・畜産・蚕糸・林業編）	昭和50	600	601			
	⑩	石川県史3	昭和49	927	927	文化11～	1814	江戸Ⅵ
	⑪	新潟県史 通史編 5 近世 3	昭和63	322	323	嘉永3	1850	江戸Ⅶ
	⑫	茨城県史＝市町村編Ⅱ	昭和50	100	100	慶応元	1865	江戸Ⅷ
	⑬	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	482	483	不明		不明

表 1 染織技術の伝播（その他の項目）

	種類	出典				時代			技術交流	本文概要
		書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦(年)	西暦(年)	区分		
①	染色型紙	沖縄県史第6巻各論編5文化2	昭和50	465	465	鎌倉～室町頃	13世紀か？	江戸前	外国（南方系）→浦添：染色技法	浦添が王都として栄えた頃、牧港を商港として外国との貿易が行なわれ、南方系の染色の技法を取り入れて、伝承したと見られる。
②	木綿晒	三重県史	昭和39	204	204	中世、文禄以降？	1593-？	江戸前	伊勢神宮の御師・奉公人→大野・岡田村	松阪を中心としたこの木綿晒の技術は非常に優秀なもので、知多木綿の本場である大野・岡田村などへは、伊勢神宮の御師、あるいは奉公人を通じて伝えられたようである。
③	染色型紙	沖縄県史第6巻各論編5文化2	昭和50	466	466		1616～1912か？	長期間	清朝→：糊引（清朝式染色技術を学び、紅型に発達させた）	糊引を近世の鎖大模様型のように、琉球独特の型染の紅型に発達せしめたのは、清朝式染色技術を学んでからではないかとされている
④	〈図8⑦〉 紅型	沖縄県史第22巻各論編10民俗1	昭和47	133	133		18世紀以前？	江戸Ⅲ～Ⅴ	南蛮の斑 斑綿布、京型、本土の型紙→琉球：紅型 ※影響	伊波普猷は、『琉球更紗の発生』（『伊波普猷選集』上巻三七三～三九〇頁）において、紅型は友禅の影響を多分に受けていると見ている。『李朝実録』中の既述の漂流民の記事によると、南蛮産の色染めの太絹衣や綿布が市にも出回っていた。伊波普猷は、『おもろさうし』巻一三（一六二三）に見える「ゑがきみはね」（絵がき御羽）・「あけずみそ」（蜻蛉御衣）を「絵がき染」と見て、これに南蛮の斑 斑綿布の影響を推定した。それに「きやう型」（京型）の技術を加え、更に本土から型紙を取寄せて「かたつき」（糊置型染）を開始し、十八世紀に入って琉球の画家に図案を描かせ、独創的な型紙による「紅型」が大成された、と考えた。
⑤	〈図8⑨〉 白張法 赤染法	群馬県史通史編5近世2	平成3	276	279	享保期	1716-1736	江戸Ⅳ	京都→桐生：染織・仕上工程・白張法・赤染法	京都糸絹問屋近江屋新十郎の手代平兵衛が桐生で染物問屋の開業を願い出ている。とりわけ享保期にかけては、染色・仕上工程の技術が導入された。享保八、九年ごろ京都の張屋久兵衛が「白張法」を桐生に伝え、その後「赤染法」も京都の職人によってこの地にもたらされた。
⑥	型紙	沖縄県史第6巻各論編5文化2	昭和50	466	466		1736-1795か？	江戸Ⅳ～Ⅴ	唐→首里：唐紙型（金銀その他各色の摺りこみ模様の襖紙の製法を習得）	浦添型は首里町端の大澤岬家に伝わり、ここは後に紅型の功績により、王府から家譜を受けた。唐紙型は首里儀保の知念家に伝わった。唐紙とは襖紙のことで知念は乾隆年間に渡唐して、染色の型紙を調査しているうちに、同様の型紙で金銀その他各色の摺りこみ模様の襖紙の製法を習得したという。
⑦	博多絞り 甘木絞り	福岡県史通史編福岡藩文化下	平成6	604	605	明和2年頃？	1765頃？	江戸Ⅳ	豊後→甘木→博多：絞染め（豊後絞りになつて甘木で行われ、それが博多にも伝わる）博多絞り・甘木絞	絞りはまた同じ筑前領内の甘木でも行われ、豊後絞になつて甘木で行なわれたものがやがて博多にも伝わったともいい、初期は「巻き絞」「板締め」が主であったとされる。博多絞りは甘木絞とともに筑前絞と総称される。
⑧	晒 染色 機織	栃木県史通史編5近世二	昭和59	4	5	近世後半期 明和年間頃 以前か？	1764-1772以降か？	江戸Ⅴ	先進地→野洲：晒・染色・機織業	真岡・足利・佐野・烏山における織物業がある。先進地から晒・染色をはじめ、機織の技術の導入が行われることで、新たな農村織物業の展開を見せていった。

	種類	出典				時代			技術交流	本文概要
		書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦(年)	西暦(年)	区分		
⑨	〈図8②〉 先染織物	兵庫県 百年史	昭和42	198	199	寛政期	1789- 1801	江戸Ⅴ	京都→多可郡：大工飛田安兵衛が京都勘大寺付近の先染織物の技術を伝えたとい、菅大織地（勘大寺織）が始まった。はじめは京都の呉服問屋（大丸・下村など）に仕上げ工程（つや出しなど）と販売とを握られ、染色も独占技術を持つ京都の染屋に依存したが、のちには染物職人の招聘に成功した。文政期に大阪販出をはじめて自立の地歩を築いた。生産地域も多可郡から加東・加西両郡に広がり、農村加工業として発展した。	
⑩	桐生染織法	秋田県史 第三巻 近世編 下	昭和40	317	317	文政期	1818- 1831	江戸Ⅵ	桐生→秋田：石川滝右衛門や夢沼基平がもたらした桐生染織法 那覇織絹⇄秋田黄八丈：相互の技術交流	那波織絹との関係は明らかではないが、相互の技術交流があつたことは当然であり、石川滝右衛門や夢沼基平のもたらした桐生染織法を加味し、領内海岸地域に自生する「ハマナス」の根を染料とするいわゆる秋田黄八丈の大成（『秋田県史』『民俗工芸編』二七四頁）もおそらく文政期に入ってからであろう。
⑪	絞り	愛知縣史 第四巻	昭和15	617	617	慶應3年頃	1867頃	江戸Ⅷ	有松→名古屋：国産絞（下園町服部與右衛門が有松絞の製法に學んで新たに創案）	國産絞は慶應三年頃名古屋下園町服部與右衛門が有松絞の製法に學んで新たに創案したもので、尾張藩はこれに國産絞の名稱を附して諸國に販賣した。
⑫	紅型	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	465	465	不明	不明	不明	閩（中国、五代十国の一）→：紅型 中国→：型紙・糊引き	紅型が最初どこから伝わったかをただちに解明するのはむずかしい。城間栄喜は父から紅型が閩から来たということを聞いたという。そして、色のことを総称してびんと呼んだという。「がた」は型染のこと、型紙の技法は中国から習ったものである。型付けのほかに「糊引」があり、この技法も中国から学んでいる。
⑬	紅型	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	昭和50	466	466	不明	不明	不明	南方・中国・日本→：紅型	紅型は南方や中国、日本の影響を受け、特に後代の友禅の影響も及んで発達した。そのため、古代友禅裂には紅型の色彩に似たものが見られる。また、紅型にも友禅の柄があり、雪の結晶模様等が見られる。
⑭	紙子	宮城県史9 （産業Ⅰ）	昭和43	775	775	平安時代 一千年前		江戸前	支那→仙台	紙子は、元来支那僧から伝えられた。
⑮	衣裳	沖縄県史 第22巻 各論編10 民俗1	昭和47	140	141		15世紀以降	江戸前	漢民族の衣と裳→胴衣・裳：（影響した）	胴衣・裳は、漢民族の衣・裳に倣ったものである。
⑯	織物	福岡県史 通史編 福岡藩（一）	平成10	548	548	寛永前後か？	1624- 1645	江戸Ⅰ	朝鮮人捕虜→福岡藩：染色・織物	俘虜の送還について藩主長政の意図は不明であるが、朝鮮人捕虜→福岡藩：染色・織物
⑰	明礬	大分県史 近世篇Ⅰ	昭和58	42	43	寛文4	1664	江戸Ⅱ	長崎の中国人→鶴見村：製造方法を教わる	五郎右衛門は浜脇村・立石村(別府市)および鶴見村で明礬製造を試みたが失敗した。そこで長崎に出て中国人から製造法を習得し、鶴見村に帰って照湯山で再度製造を試みてようやく成功した。
⑱	緋羊	鹿児島県史 第二巻	昭和15	522	522	安永元～文政2	1772- 1819	江戸Ⅴ～Ⅵ	大阪→大島：織物 上國→大島：羊毛織物	安永二年正月付近習役村上範村の達に家老樺山久智の差図として毛織物の種類によらず、稽古希望者は大阪へ遣し稽古申し付けるにつき、之も申し出るようにとあるが、要するに、毛織を起こさんための達しと思はれる。
⑲	針	兵庫県史 第5巻	昭和55	42	42	寛政11年	1799	江戸Ⅴ	長崎→浜坂村：市原惣兵衛、針職人2人（高比良武兵衛・香具屋喜五郎）雇い、戻る	浜坂村（美方郡浜坂町）の市原惣兵衛が、医学の勉強のため長崎に遊学するにさいし、帰国にさいし長崎の針職人高比良武兵衛と香具屋喜五郎の二人を雇い、同十一年頃戻ったという。

	種類	出典				時代			技術交流	本文概要
		書名	出版年	開始頁	終了頁	和暦(年)	西暦(年)	区分		
⑳	売買職人	石川県史3	昭和49	929	930	文化・文政	1804-1831	江戸VI	近江→能州：織物職人招致	本文がよく分からないが、売買について書かれている模様 文化10年に能州御奉行、近江より職人。
㉑	針	富山県史通史編IV 近世下	昭和59	353	354	文久？	1861-1864？	江戸VIII？	長崎→氷見の人某：伝習し来れる	凡四百余年前、氷見の人某長崎に至り、其製方を伝習し来れるなり（「永見郡志」）。
㉒	寝間着	青森県史民俗編資料 津軽	平成24	117	117	不明（引用の刊行年は2004年）	不明	不明	樺太→内真部：引き揚げてきた人が寝間着の作り方を教えた	内真部では、樺太から引き上げてきた人が、寝間着の作り方を教えた。 （『後潟・奥内・油川・内真部・西田沢の民俗』）
㉓	モンペ	青森県史民俗編資料 南部	平成11	107	107	不明（刊行年平成13年3月）	不明	不明	秋田→七戸町：来た人がモンペを初めて穿いて見せた	モンペをはじめてはいてみせたのは、秋田から来た人であった。
㉔	どんざさしこ	福岡県史通史編福岡藩 (二)	平成12	711	711	不明	不明	不明	奉公先→浦の女性：裁縫技術	浦の女性の多くはその少女時代を近郊の農村などに子守などの奉公に出ていたが、そこで裁縫の技術を習得したのだという。

生で染物問屋の開業を願い出ているのも好例の一つとなろう。こうした京都との人の往来に伴って、京都から種々の先進技術が伝来した。とりわけ享保期にかけては、染色・仕上工程の技術が導入された。享保八、九年ごろ京都の張屋久兵衛が「白張法」を桐生に伝え、その後「赤染法」も京都の職人によってこの地にもたらされた（資料編15－一七三他）。

（山城・丹後〈図8〉⑨、その他の項目〈表1〉⑤）

ここでは登せ糸を通じて人の往来が盛んになることにより、染色技法も移転したということが指摘されている。このような記述からは、技術伝播は、常に「人」に依るものであることを示しているように感じられる。これまで、染織史においては使用した人の名前は染織品と共に伝えられることがあるが、制作者や商人に関する情報は少ない。当該技術に関わった人々の名が記されていることから、人が動かずに、技術の移転はないことが理解できる。ここからは技術伝播に関わった人物をキーワードとしての情報収集も必要な作業と考えられる。

3-2 技術伝播の要因

本項では技術伝播の要因について検討した。今回抽出された情報は都道府県史という二次資料であるが、より多くのデータから技術伝播の要因について検証したいと考えた。それは、現段階で技術伝播の要因を探り、今後、実態を考察するにあたり必要となる、追加で検討すべき資料群を検討したかったためである。記述を整理したところ、技術伝播の要因はいくつかに分類ができることが明らかとなった。

技術指導を目的として藩主、権力者、織物問屋が技術者を招聘する場合、藩が商人に指導させる例もある。一方、招聘するのではなく、技術を求めて旅に出て持ち帰ることもある。そのほか、養蚕の蚕種、綿の種などを手に入れる場合や、西陣の大火などの災害により技術者が移転して伝えたというような例もみられる。以下、詳細をみていきたい。

藩主やその側近が技術指導を目的として技術者を招く例としては、管見の限り、結城忠次の例が早い。慶長6（1601）年以降、結城秀康は越前福井に移封され、翌年、伊奈備前守忠次が代官として結城地方を治めた。結城忠次は、この地方に伝わる結城紬改良のため、信州上田（長野）から結城地方（茨城）へ職工を招き染色の改善と柳条の職法を指導させたという〈絹織物（図2）⁵〉。その後、寛文年中（1661-1673）には、越後長岡藩が信州佐久郡望月郷（現長野県佐久市）から滝沢五兵衛を招き、新たな機業技術の導入を行なったことが領内機業発展のきっかけとなったという記述も見られる〈絹織物（図2）¹¹〉。

米沢藩を立て直したことで知られる上杉治憲（鷹山公）も、長井紬や米流のために、安永5（1776）年に越後・小千谷から縮師を招き技術導入・職工養成に努めている⁴⁾。同じく織物では、文政10（1827）年には、村松藩から任命された「高機世話役」の勘右衛門と清八が、高機の買入れと技術導入のため足利へ赴き、熟練織子を二年契約で雇っている〈機（図6）¹²〉。さらに3年後、清八は、結城から男女五人の染織職人を雇い、機具一式を導入した例〈機（図6）¹³〉が見られる。

養蚕の場合も藩に依る技術指導の記述が見られる。嘉永の改革頃、新庄藩は桑の植付け指導のため、米沢藩領勸進代村の進藤仁右衛門を招く〈養蚕・製糸（図1）³⁰〉例や、嘉永4（1851）年、大洲藩では藩士石河孫左衛門と山本嘉兵衛を甲府へ派遣し、数名の技師を雇い、苗1,000本を購入して帰国し、小田郷に植栽した例がある〈養蚕・製糸（図1）²⁹〉。一方、小松藩は西条絹屋の紹介で安政4（1857）年、丹波から技師二人を招いている〈養蚕・製糸（図1）³¹〉。

このような指導は藍にも見られ、安政5（1858）年、箱館奉行（北海道函館）は仙台（宮城）から藍作になれた者二名を招いている〈藍・紅花・紫根（図5）藍⁸〉。

他地域から嫁いだ嫁が技術をもっていた例としては、曾代糸の例がある。福光の曾代糸の起源は、宝暦年間（1751-1764）以後に美濃国曾代村（現岐阜）から福光村（現岐阜県岐阜市）に引越し医業を営んだ人の妻が蚕を飼い、糸を挽くのを見習い覚えたのに始まると伝えられている〈養蚕・製糸（図1）¹¹〉。

一方、偶然地域を訪れた人により技術がもたらされる記載も見られる。紫根については、寛政（1789-1801）の頃に加賀（石川）から来た染師与右衛門が、博多（福岡）の白水長左衛門、肥後屋新助の両織元に紫根染による紫染の技術を伝えたという〈藍・紅花・紫根（図5）紫根¹〉。緋に関しても、文化年中（1804-1818）、たまたま五十川村（現山形県長井市五十川）の牛沢十助宅に一浮浪人が来て、横飛白の製織を伝えたことが紬緋のはじまりだという〈絹織物（図2）³²、緋（図7）⁹〉。

技術を求めて旅に出る例としては、長浜縮緬が知られる。長浜縮緬は、近江浅井郡難波村（滋賀県長浜市）の林介と庄九郎が、二年間丹後（京都）を旅して織方を学び、宝暦2（1752）年に藩の許可をえて生産を創めたのに由来する。また、学ぶきっかけは宮津の種紙商人庄右衛門が長浜地方に商いに来訪したとき、丹後縮緬が有利であることを両人がきいたことによる〈絹織物（図2）²⁴〉。『養蚕秘録』（享和2〈1802〉年刊）の著者で知られる上垣守国も、寛政9（1797）年蚕糸業技術をもとめて信濃・関東から陸奥国伊達・信夫郡に赴く。帰国して陸奥国梁川（福島県伊達郡梁川町）と土質が酷似しているとみて、気多郡納屋村（現兵庫県豊岡市）に蚕室をたてて改良に努め、享和3（1803）年からは自宅にこれを移したという〈養蚕・製糸（図1）¹⁹〉。栃尾紬についても、寛政（1789-1801）

の頃、縞物の開発に取り組んでいた栃堀村（現新潟県長岡市）の庄屋植村角左衛門は、妻を天明の頃から縞紬を始めていた荷頃村（現新潟県長岡市）の大崎オヨのもとへ派遣し、その技術を学ばせ、さらに改良を加えて商品化に成功したという〈絹織物（図2）²⁸〉。

旅から戻り、学んだ技術を近隣に伝えた例も見られる。文化年中（1804-1818）、成田村（現山形県長井市成田）の飯沢半右衛門は、下総結城（茨城）に赴き、紬の製法を学び、これを村々に伝えた〈絹織物（図2）³²、緋（図7）⁹〉。

広めた人物が行商人の例もある。文政（1818-1831）頃、桐油行商人山田屋勘右衛門が、行商の途中下総（茨城県）の結城で、各地から大量の木綿糸を買い付け、織物生産をしているという状況を見聞き、同地で糸取法を学ぶと同時に「時計車」と称する糸繰車を手に入れ帰町した。勘右衛門は宮島屋清八とともに綿糸生産を開始し、家中のみならず村松藩（現新潟県五泉市）領内にも広めた〈木綿・木綿織（図3）¹⁹〉。

先ほど、大洲藩の例〈養蚕・製糸（図1）²⁹〉では、技師と苗を共に移動させることで技術を移転していることが理解できるが、同様に種子や苗を持ち込む例も見られる。延宝4（1676）年、弓浜部（現鳥取県米子周辺）の綿作の始まりは、境村小室の新兵衛が、備中の玉島（現倉敷市）から綿の実を移植したのに始まるという〈木綿・木綿織（図3）⁴〉。天保5（1834）年、宇和島藩谷口文六が四国巡礼中に阿波（徳島）から種子を持ち帰り、天保9（1838）年、河野六兵衛が床付けに成功した〈藍・紅花・紫根（図5）藍⁵〉。これらの記述からは、種がくるだけでは根付くことはなく、人が移植しないと技術は移転しないことが理解できる。

また、問屋が介する場合は紅花、藍、綿、緋の例に見られる。寛延（1748-1751）、京都商人若代四郎左衛門に藩（伯耆〈現鳥取県中部・西部〉）が「紅花の作り方、花の仕立」などを領内の百姓に伝授するよう命じた〈藍・紅花・紫根（図5）紅花¹〉。天明・寛政（1781-1801）の頃、江戸の商人柳屋五郎三郎の召仕太助・半兵衛が足立郡上村（現埼玉県上尾市）の百姓矢五郎に最上紅花（現山形県村山地方）の種を与え栽培させた〈藍・紅花・紫根（図5）紅花²〉。

藍に関しても、天保11（1840）年、渡部伊右衛門ら織物問屋が桐生（群馬）から染織人高田源兵衛を招き、染屋を城下川井小路（山形県米沢市）に開いたという記述がある〈藍・紅花・紫根（図5）⁷〉。安永（1772-1781）頃、三井の手代らが伯耆（現鳥取県中部・西部）に上方向きの木綿生産の技術を指導した〈木綿・木綿織（図3）¹¹〉。慶応元年（1865）には問屋が中心となって、緋織の導入に力を入れた結果、中河原村（現栃木県小山市）の大塚いさ、須藤うたが緋織に成功した〈緋（図7）¹²〉。

また、すでに知られているが、災害に依る移転の例も見られる。享保15（1730）年、西陣大火による罹災職人の岐阜などへの移住によって岐阜縮緬「美濃八丈」等の美濃の絹織物生産は順調な発展をとげた〈絹織物（図2）¹⁸〉。

2つの地域からの影響を記してあることもある。弘化元（1845）年、阿波の人（久三郎）が書き残していった「織絹法」から「浮織」の法を考案し、伊予国（愛媛）から伝来していた高機をもって手挽糸で縞木綿を織った例が記されている。〈機（図6）¹⁵〉。

このように、技術移転の要因は多くの人々の交流により生まれたと考えられる。今回の検討により、技術伝播には商人や問屋という人々の介在が多く見られる事が明らかとなった。実態を考察するためには藩政資料だけでなく、商人の日記や資料も追加して情報を検証する必要がある。

また、人が往来するためには交通網の整備が必要である。寛永12（1635）年の武家諸法度により始まった参勤交代の影響もあり、江戸の街道は整備をされていった。近世における技術伝播の活発さの背景には、人の往来があるといえる。

4. 今後の課題

江戸時代享保期以降は各藩において専売政策が盛んとなり、多くの染織品に関わる品目が藩の特産物として生産を奨励されている。これらの実態を明らかにするには本研究により得られた他地域との交流の情報を基礎として、まずは藩政資料などの地方誌との照合を進めていきたい。江戸・京都・大阪などの都市で出版された『毛吹草』『京雀』『江戸雀』『女用訓蒙図彙』『羽倉考』『和漢三才図会』『守貞漫稿』等の特産物に関する情報（特に材料や道具に関する記述）との比較、商人等の活動記録、各産地の民俗資料館に所蔵されている道具との因果関係を考察することで、各地域における染織技術の実態、染織技術と材料、道具の関わり の解明に着手したい。

本稿では触れなかったが、山形県や新潟県等の原材料の生産地では、丹後縮緬の生産地へ出荷したというような原材料の出荷先の情報も多くみられた。物流という観点の情報についても改めて整理を進めていきたい。

おわりに

本稿を執筆する中で、都道府県史からこれだけ多くの技術伝播の情報が抽出されたことに驚いた。我が国には多様な染織技術が根付いている。それらの技術を文化財として保護しようと、無形文化財という枠組みが設けられている。特に、昭和50（1975）年の改正では、重要無形文化財の保持団体認定に指定要件を設け、当該技術の原材料や用具に関する項目、より具体化した保護政策をとってきた。では、その原材料や用具は当該技術にとってどのような意義を持つものなのであろうか。その原材料や用具は、技術の発生時からその地域にあったものであろうか、あるいは他地域から伝播し受容されたものであるのか、そのような「技術伝播」という視点での情報整理は常に意識すべきであろう。

未来に文化財を受け継ぐためには、それらの情報を整理したうえで、当該技術の特徴の「核」となる原材料や用具を検討する必要があるのではないだろうか。

謝辞

整理作業には牛村仁美氏（無形文化遺産部研究補佐員）に加え、以下の染織分野、民俗分野が専門の大学院生や修了生（計8名）の協力を得た（敬称略）。記して感謝いたします。

牛村仁美（東京文化財研究所無形文化遺産部研究補佐員）
大淵幹生（東京文化財研究所無形文化遺産部学生アシスタント）
川井結花子（東京文化財研究所無形文化遺産部学生アシスタント）
菊田祥子（東京文化財研究所無形文化遺産部学生アシスタント）
武井成美（東京文化財研究所無形文化遺産部学生アシスタント）
浅野璃奈（東京文化財研究所無形文化遺産部アルバイト）
志村映美（東京文化財研究所無形文化遺産部アルバイト）
長谷川沙織（東京文化財研究所無形文化遺産部アルバイト）

付記

本稿は平成27年度～平成30年度科学研究費 若手研究A（課題番号 15H05379）「染織技術の伝承に関する研究—材料・道具に焦点をあてて—」の成果の一部である。

《注》

- 1) 拙著「染織技法の分業化に関する研究序説」『無形文化遺産研究報告』第8号、東京文化財研究所 pp.1-21、2014年
- 2) 『資料 染織技術の伝承に関する研究—材料・道具に焦点をあてて—』平成27～30年度科学研究費報告書（若手研究A、課題番号15H05379 研究代表者 菊池理予）2019年6月
- 3) 註1 前掲書
- 4) 『山形県史本編5（商工業編）』昭和50年、pp.406-410

菊池理予（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

中村弥生（文化学園大学 和装文化研究所）

使用県史一覧

都道府県		書籍名	出典(編集・発行、刊行年)
1	北海道	新北海道史 第2巻 通説1	編集発行:北海道, 製作:新北海道史印刷出版共同企業体, 昭和45年
		新北海道史 第3巻 通説2	編集発行:北海道, 製作:新北海道史印刷出版共同企業体, 昭和46年
		新北海道史 第4巻 通説3	編集発行:北海道, 製作:新北海道史印刷出版共同企業体, 昭和48年
		新北海道史 第5巻 通説4	編集発行:北海道, 製作:新北海道史印刷出版共同企業体, 昭和50年
2	青森県	青森県史 民俗編資料下北	編集:青森県史編さん民俗部会, 発行:青森県, 平成19年(2007)
		青森県史 民俗編資料津軽	編集:青森県史編さん民俗部会, 発行:青森県, 平成26年(2014)
		青森県史 民俗編資料南部	編集:青森県史編さん民俗部会, 発行:青森県, 平成13年
		青森県の歴史	著者:長谷川成一・村越潔・小口雅史・斉藤利男・小岩信竹, 発行者:野澤伸平, 平成12年
		※ 青森県史通史編全3巻	平成29年度刊行(時期的に未確認)
3	岩手県	岩手県史第3巻 中世編下	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和36年
		岩手県史第4巻近世編1	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和36年
		岩手県史第5巻近世編2	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和38年
		岩手県史第6巻近代編1	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和37年
		岩手県史第7巻近代編2	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和37年
		岩手県史第8巻近代編3	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和39年
		岩手県史第9巻近代編4	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和39年
		岩手県史第11巻民俗編	著者:岩手県, 印刷兼発行所:株式会社 杜陵印刷, 昭和40年
4	宮城県	宮城県史1(古代・中世史)	著者:宮城県, 編纂者:宮城県史編纂委員会, 発行者:財団法人宮城県史刊行会, 昭和32年
		宮城県史2(近世史)	著者:宮城県, 編纂者:宮城県史編纂委員会, 発行者:財団法人宮城県史刊行会, 昭和41年
		宮城県史3(近代史)	著者:宮城県, 編纂者:宮城県史編纂委員会, 発行者:財団法人宮城県史刊行会, 昭和39年
		宮城県史9(産業)Ⅰ	著者:宮城県, 編纂者:宮城県史編纂委員会, 発行者:財団法人宮城県史刊行会, 昭和43年
		宮城県史19(民俗)	著者:宮城県, 編纂者:宮城県史編纂委員会, 発行者:財団法人宮城県史刊行会, 昭和31年
		宮城県史20(民俗Ⅱ)	著者:宮城県, 編纂者:宮城県史編纂委員会, 発行者:財団法人宮城県史刊行会, 昭和35年
5	秋田県	秋田県史第1巻 古代中世編	編集発行:秋田県, 昭和37年
		秋田県史第2巻 近世編上	編集発行:秋田県, 昭和39年
		秋田県史第3巻 近世編下	編集発行:秋田県, 昭和40年
		秋田県史第5巻 明治編	編集発行:秋田県, 昭和39年
		秋田県史第6巻 大正・昭和編	編集発行:秋田県, 昭和40年
		秋田県史 民俗・工芸編	編集発行:秋田県, 昭和37年
6	山形県	山形県史第1巻 原始古代中世編	編さん兼発行者:山形県, 昭和57年
		山形県史第2巻 近世編上	編さん兼発行者:山形県, 昭和60年
		山形県史第3巻 近世編下	編さん兼発行者:山形県, 昭和62年
		山形県史第4巻 近現代編上	編さん兼発行者:山形県, 昭和59年
		山形県史第5巻 近現代編下	編さん兼発行者:山形県, 昭和61年
		山形県史第6巻 現代編上	編さん兼発行者:山形県, 平成15年
		山形県史第7巻 現代編下	編さん兼発行者:山形県, 平成16年
		山形県史 本篇5 商工業編	編纂兼発行者:山形県, 昭和50年
7	福島県	山形県史 本篇6 漁業・畜産業・蚕糸業・林業編	編纂兼発行者:山形県, 昭和50年
		福島県史1 通史編1 原始・古代・中世	編集・発行:福島県(文書広報課), 昭和44年
		福島県史第2巻 通史編2 近世1	編集・発行:福島県(文書学事課), 昭和46年
		福島県史第3巻 通史編3 近世2	編集・発行:福島県(文書学事課), 昭和45年
		福島県史第4巻 通史編4 近代1	編集・発行:福島県(文書学事課), 昭和46年
		福島県史第5巻 通史編5 近代2	編集・発行:福島県(文書学事課), 昭和46年
		福島県史第18巻 各論編4 産業経済1	編集・発行:福島県(文書学事課), 昭和45年
		福島県史第19巻 各論編5 産業経済2	編集・発行:福島県(文書学事課), 昭和46年
8	茨城県	茨城県史＝市町村編Ⅱ	編者:茨城県史編さん総合部会, 発行者:茨城県知事 岩上二郎, 発行所:茨城県, 昭和50年
		茨城県史＝市町村編Ⅲ	編者:茨城県史編さん市町村史部会, 発行者:茨城県知事 竹内藤男, 発行所:茨城県, 昭和56年
		茨城県史＝近現代編	監修:茨城県史編集委員会, 発行者:茨城県知事 竹内藤男, 発行所:茨城県, 昭和59年
		茨城県史＝近世編	監修:茨城県史編集委員会, 発行者:茨城県知事 竹内藤男, 発行所:茨城県, 昭和60年
9	栃木県	栃木県史 通史編4 近世一	編集:栃木県史編さん委員会, 発行:栃木県, 昭和56年
		栃木県史 通史編5 近世二	編集:栃木県史編さん委員会, 発行:栃木県, 昭和59年
10	群馬県	群馬県史 通史編5 近世2	編集:群馬県史編さん委員会, 発行:群馬県, 平成3年
		群馬県史 通史編8 近現代2	編集:群馬県史編さん委員会, 発行:群馬県, 平成元年
11	埼玉県	新編埼玉県史 別編1 民俗1	編集発行:埼玉県, 昭和63年
		新編埼玉県史 通史編2 中世	編集発行:埼玉県, 昭和63年
		新編埼玉県史 通史編4 近世2	編集発行:埼玉県, 平成元年
		新編埼玉県史 通史編5 近代1	編集発行:埼玉県, 昭和63年
		新編埼玉県史 通史編6 近代2	編集発行:埼玉県, 平成元年
		新編埼玉県史 通史編7 現代	編集発行:埼玉県, 平成3年
12	千葉県	千葉県の歴史 通史編 古代2 県史シリーズ2	編集:財団法人 千葉県史料研究財団, 発行:千葉県, 平成13年
		千葉県の歴史 通史編 中世 県史シリーズ3	編集:財団法人 千葉県史料研究財団, 発行:千葉県, 平成19年
		千葉県の歴史 通史編 近世1 県史シリーズ4	編集:財団法人 千葉県史料研究財団, 発行:千葉県, 平成19年
		千葉県の歴史 通史編 近現代1 県史シリーズ6	編集:財団法人 千葉県史料研究財団, 発行:千葉県, 平成14年
		千葉県の歴史 通史編 近現代2 県史シリーズ7	編集:財団法人 千葉県史料研究財団, 発行:千葉県, 平成18年
13	東京都	東京百年史 第1巻	編集:東京都百年史編集委員会, 著作発行:東京都, 昭和48年
		東京百年史 第2巻	編集:東京都百年史編集委員会, 著作発行:東京都, 昭和47年
		東京百年史 第3巻	編集:東京都百年史編集委員会, 著作発行:東京都, 昭和47年
		東京百年史 第4巻	編集:東京都百年史編集委員会, 著作発行:東京都, 昭和47年

都道府県	書籍名	出典(編集・発行、刊行年)
14 神奈川県	神奈川県史 通史編3 近世(2)	編集：神奈川県県民部県史編集室，発行：神奈川県，昭和58年
	神奈川県史 通史編4 近代・現代(1)	編集：神奈川県県民部県史編集室，発行：神奈川県，昭和55年
	神奈川県史 通史編6 近代・現代(3)	編集：神奈川県県民部県史編集室，発行：神奈川県，昭和56年
	神奈川県史 通史編7 近代・現代(4)	編集：神奈川県県民部県史編集室，発行：神奈川県，昭和57年
	神奈川県史 各論編 2 産業・経済	編集：神奈川県県民部県史編集室，発行：神奈川県，昭和58年
15 新潟県	新潟県史 通史編2 中世	編集発行：新潟県，昭和62年
	新潟県史 通史編3 近世1	編集発行：新潟県，昭和62年
	新潟県史 通史編4 近世2	編集発行：新潟県，昭和63年
	新潟県史 通史編5 近世3	編集発行：新潟県，昭和63年
	新潟県史 通史編6 近代1	編集発行：新潟県，昭和62年
	新潟県史 通史編7 近代2	編集発行：新潟県，昭和63年
	新潟県史 通史編8 近代3	編集発行：新潟県，昭和63年
	編集発行：新潟県，昭和63年	編集発行：新潟県，昭和63年
	新潟県史 資料編22 民俗・文化財1 民俗編1	編集発行：新潟県，昭和57年
	新潟県史 資料編23 民俗・文化財2 民俗編2	編集発行：新潟県，昭和59年
16 富山県	富山県史 通史編 I 原始・古代	編集発行：富山県，昭和51年
	富山県史 通史編 II 中世	編集発行：富山県，昭和59年
	富山県史 通史編 III 近世 上	編集発行：富山県，昭和57年
	富山県史 通史編 IV 近世 下	編集発行：富山県，昭和58年
	富山県史 通史編 V 近代 上	編集発行：富山県，昭和56年
	富山県史 通史編 VI 近代 下	編集発行：富山県，昭和59年
	富山県史 民俗編	編集発行：富山県，昭和48年
17 石川県	石川県史 第1編	発行所：石川県図書館協会，昭和49年
	石川県史 第3編	発行所：石川県図書館協会，昭和49年
	石川県史 第4編	発行所：石川県図書館協会，昭和49年
18 福井県	福井県史 通史編1 原始・古代	編集発行：福井県，平成5年
	福井県史 通史編2 中世	編集発行：福井県，平成6年
	福井県史 通史編3 近世1	編集発行：福井県，平成6年
	福井県史 通史編4 近世2	編集発行：福井県，平成8年
	福井県史 通史編5 近現代1	編集発行：福井県，平成6年
	福井県史 通史編6 近現代2	編集発行：福井県，平成8年
	福井県史 資料編15 民俗	編集発行：福井県，昭和59年
19 山梨県	山梨県史 通史編1 原始・古代	編集発行：山梨県，平成16年
	編集発行：山梨県，平成19年	編集発行：山梨県，平成19年
	編集発行：山梨県，平成18年	編集発行：山梨県，平成18年
	山梨県史 通史編4 近世2	編集発行：山梨県，平成19年
	山梨県史 通史編5 近現代1	編集発行：山梨県，平成17年
	山梨県史 通史編6 近現代2	編集発行：山梨県，平成18年
	山梨県史 民俗編	編集発行：山梨県，平成15年
20 長野県	長野県史 通史編 第1巻 原始・古代	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，平成元年
	長野県史 通史編 第2巻 中世1	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，昭和61年
	長野県史 通史編 第3巻 中世2	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，昭和62年
	長野県史 通史編 第4巻 近世1	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，昭和62年
	長野県史 通史編 第5巻 近世2	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，昭和63年
	長野県史 通史編 第6巻 近世3	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，平成元年
	長野県史 通史編 第7巻 近代1	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，昭和63年
	長野県史 通史編 第8巻 近代2	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，平成元年
	長野県史 通史編 第9巻 近代3	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，平成2年
	長野県史 近代史料編 第5巻(三)産業 蚕糸業	編集者：長野県，発行者：社団法人 長野県史刊行会，昭和55年
21 岐阜県	岐阜県史 通史編 近世 上	編集発行：岐阜県，昭和43年
	岐阜県史 通史編 近世下	編集発行：岐阜県，昭和47年
	岐阜県史 通史編 近代 上	編集発行：岐阜県，昭和42年
	岐阜県史 通史編 近代 中	編集発行：岐阜県，昭和45年
	岐阜県史 通史編 現代	編集発行：岐阜県，昭和48年
22 静岡県	静岡県史 通史編4 近世二	編集発行：静岡県，平成9年
	静岡県史 通史編5 近現代一	編集発行：静岡県，平成8年
	静岡県史 通史編6 近現代二	編集発行：静岡県，平成9年
23 愛知県	愛知縣史 第三巻	著作兼発行者：愛知県，昭和14年
	愛知縣史 第四巻	著作兼発行者：愛知県，昭和15年
24 三重県	三重県史	発行：三重県，昭和39年
	三重県史 通史編 原始・古代	編集発行：三重県，平成28年
	三重県史 通史編 近現代1	編集発行：三重県，平成27年
	三重県史 資料編 近世2	編集発行：三重県，平成15年
	三重県史 資料編 近世3上	編集発行：三重県，平成20年
	三重県史 資料編 近世3下	編集発行：三重県，平成24年
	三重県史 資料編 近代3 産業・経済	編集発行：三重県，昭和63年
	三重県史 別編 民俗	編集発行：三重県，平成24年

都道府県	書籍名	出典(編集・発行、刊行年)
25 滋賀県	滋賀県史 第3巻(中世・近世)	編者:滋賀県, 発行者:中村安孝, 昭和46年
	滋賀県史 第4巻(最近世)	編者:滋賀県, 発行者:中村安孝, 昭和46年
	滋賀県史 昭和編第1巻 概説編	編さん:滋賀県史編さん委員会, 発行:滋賀県, 昭和61年
	滋賀県史 昭和編第2巻 行政編	編さん:滋賀県史編さん委員会, 発行:滋賀県, 昭和49年
	滋賀県史 昭和編第3巻 農林編	編さん:滋賀県史編さん委員会, 発行:滋賀県, 昭和51年
	滋賀県史 昭和編第4巻 商工編	編さん:滋賀県史編さん委員会, 発行:滋賀県, 昭和55年
26 京都府	滋賀県史 昭和編第6巻 教育文化編	編さん:滋賀県史編さん委員会, 発行:滋賀県, 昭和60年
	京都の歴史1 平安の新京	著作権者:京都市, 発行者:渡辺泰孝, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和45年
	京都の歴史3 近世の胎動	著作権者:京都市, 発行者:田寺正敬, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和43年
	京都の歴史4 桃山の開花	著作権者:京都市, 発行者:田寺正敬, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和44年
	京都の歴史5 近世の展開	著作権者:京都市, 発行者:渡辺泰孝, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和47年
	京都の歴史6 伝統の定着	著作権者:京都市, 発行者:渡辺泰孝, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和48年
	京都の歴史7 維新の激動	著作権者:京都市, 発行者:渡辺泰孝, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和49年
	京都の歴史8 古都の近代	著作権者:京都市, 発行者:武田季男, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和50年
	京都の歴史9 世界の京都	著作権者:京都市, 発行者:武田季男, 発行所:株式会社学芸書林, 昭和51年
27 大阪府	史料 京都の歴史 第1巻 概説	著作権者:京都市, 発行者:下中弘, 発行所:株式会社平凡社, 平成3年
	史料 京都の歴史 第4巻 市街・生業	著作権者:京都市, 発行者:下中邦彦, 発行所:株式会社平凡社, 昭和56年
	大阪百年史	編集発行:大坂府, 昭和43年
28 兵庫県	大阪府史 第6巻 近世編Ⅱ	編集:大阪府史編集専門委員会, 発行:大坂府, 昭和62年
	兵庫県百年史	編集:兵庫県史編集委員会, 発行:兵庫県, 昭和42年
	兵庫県史 第4巻	編集:兵庫県史編集専門委員会, 発行:兵庫県, 昭和54年
29 奈良県	兵庫県史 第5巻	編集:兵庫県史編集専門委員会, 発行:兵庫県, 昭和55年
	奈良県史 第1巻 地理・地域史・景観	編集:奈良県史編集委員会, 編者:藤田佳久, 発行者:中村安孝, 発行所:株式会社名著出版, 昭和60年
30 和歌山	奈良県史 第12巻 民俗(上)-大和の伝承文化	編集:奈良県史編集委員会, 編者:代表 岩井宏實, 発行者:中村安孝, 発行所:株式会社名著出版, 昭和61年
	和歌山県史 近現代一	編集:和歌山県史編さん委員会, 発行:和歌山県, 平成元年
31 鳥取県	和歌山県史 近現代二	編集:和歌山県史編さん委員会, 発行:和歌山県, 平成5年
	鳥取県史 第1巻 原始古代	編集発行:鳥取県, 昭和47年
	鳥取県史 第2巻 中世	編集発行:鳥取県, 昭和48年
	鳥取県史 第3巻 近世 政治	編集発行:鳥取県, 昭和54年
	鳥取県史 第4巻 近世 社会経済	編集発行:鳥取県, 昭和56年
	鳥取県史 第5巻 近世 文化産業	編集発行:鳥取県, 昭和57年
32 島根県	鳥取県史 近代 第3巻 経済篇	編集発行:鳥取県, 昭和44年
	島根県誌	編纂:島根県教育会, 昭和54年
	島根県史(第二巻)	編者:島根県, 発行者:中村安孝, 発行所:株式会社名著出版, 昭和47年
	島根県史(第四巻)	編者:島根県, 発行者:中村安孝, 発行所:株式会社名著出版, 昭和47年
	島根県史(第七巻)	編者:島根県, 発行者:中村安孝, 発行所:株式会社名著出版, 昭和47年
	島根県史(第八巻)	編者:島根県, 発行者:中村安孝, 発行所:株式会社名著出版, 昭和47年
	新修島根県史 通史篇1 考古・古代・中世・近世	昭和43年, 島根県
	新修島根県史 通史篇2 近代	昭和42年, 島根県
33 岡山県	新修島根県史 通史篇3 現代	昭和42年, 島根県
	岡山県史 第3巻 古代Ⅱ	編纂:岡山県史編纂委員会, 発行:岡山県, 出版:山陽新聞社, 平成元年
	岡山県史 第8巻 近世Ⅲ	編纂:岡山県史編纂委員会, 発行:岡山県, 出版:山陽新聞社, 昭和62年
	岡山県史 第10巻 近代Ⅰ	編纂:岡山県史編纂委員会, 発行:岡山県, 出版:山陽新聞社, 昭和60年
	岡山県史 第11巻 近代Ⅱ	編纂:岡山県史編纂委員会, 発行:岡山県, 出版:山陽新聞社, 昭和62年
34 広島県	岡山県史 第15巻 民俗Ⅰ	編纂:岡山県史編纂委員会, 発行:岡山県, 出版:山陽新聞社, 昭和58年
	広島県史 原始 古代 通史Ⅰ	編集発行:広島県, 昭和55年
	広島県史 近世Ⅰ 通史Ⅲ	編集発行:広島県, 昭和56年
	広島県史 近世Ⅱ 通史Ⅳ	編集発行:広島県, 昭和59年
	広島県史 近代Ⅰ 通史Ⅴ	編集発行:広島県, 昭和55年
	広島県史 近代Ⅱ 通史Ⅵ	編集発行:広島県, 昭和56年
	広島県史 現代 通史Ⅶ	編集発行:広島県, 昭和58年
	広島県史 民俗編	編集発行:広島県, 昭和53年
35 山口県	山口県史 資料編 民俗Ⅰ 民俗誌再考	編集発行:山口県, 平成14年
	山口県史 通史編 原始・古代	編集発行:山口県, 平成20年
	山口県史 通史編 中世	編集発行:山口県, 平成24年
	山口県史 通史編 近代	編集発行:山口県, 平成28年
	山口県史 通史編 民俗編	編集発行:山口県, 平成22年
36 徳島県	徳島県史 第1巻	編集者:徳島県史編さん委員会, 発行所:徳島県, 昭和39年
	徳島県史 第2巻	編集者:徳島県史編さん委員会, 発行所:徳島県, 昭和41年
	徳島県史 第4巻	編集者:徳島県史編さん委員会, 発行所:徳島県, 昭和40年
	徳島県史 第5巻	編集者:徳島県史編さん委員会, 発行所:徳島県, 昭和41年
	徳島県史 第6巻	編集者:徳島県史編さん委員会, 発行所:徳島県, 昭和42年

都道府県	書籍名	出典(編集・発行、刊行年)
37 香川県	香川県史 第1巻 通史編 原始・古代	編集発行:香川県, 出版:四国新聞社, 昭和63年
	香川県史 第2巻 通史編 中世	編集発行:香川県, 出版:四国新聞社, 平成元年
	香川県史 第3巻 通史編 近世Ⅰ	編集発行:香川県, 出版:四国新聞社, 平成元年
	香川県史 第4巻 通史編 近世Ⅱ	編集発行:香川県, 出版:四国新聞社, 平成元年
	香川県史 第5巻 通史編 近代Ⅰ	編集発行:香川県, 出版:四国新聞社, 昭和62年
	香川県史 第14巻 資料編 民俗	編集発行:香川県, 出版:四国新聞社, 昭和60年
38 愛媛県	愛媛県史 古代Ⅱ・中世	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和59年
	愛媛県史 近世上	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和61年
	愛媛県史 近世下	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和62年
	愛媛県史 近代上	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和61年
	愛媛県史 近代下	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和63年
	愛媛県史 民俗上	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和58年
39 高知県	愛媛県史 社会経済3 商工	編集:愛媛県史編さん委員会, 発行:愛媛県, 昭和61年
	高知県史 古代・中世	編集発行:高知県, 昭和46年
	高知県史 近世上	編集発行:高知県, 昭和43年
40 福岡県	高知県史 民俗	編集発行:高知県, 昭和53年
	福岡県史 近代史料編 綿糸紡績業	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:福岡県, 昭和60年
	福岡県史 通史編 福岡藩(一)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 平成12年
	福岡県史 通史編 福岡藩(二)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:福岡県, 平成14年
	福岡県史 通史編 福岡藩 文化(上)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 平成5年
	福岡県史 通史編 福岡藩 文化(下)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 平成6年
	福岡県史 通史編 近代 産業経済(一)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 平成15年
	福岡県史 通史編 近代 産業経済(二)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 平成12年
	福岡県史 民俗資料編 ムラの生活(上)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 昭和60年
	福岡県史 民俗資料編 ムラの生活(下)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 昭和63年
41 佐賀県	福岡県史 近世研究編 福岡藩(二)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 昭和58年
	福岡県史 近世研究編 福岡藩(三)	編纂:財団法人 西日本文化協会, 発行:財団法人 西日本文化協会, 昭和63年
	佐賀県史 上巻	編者:佐賀県史編さん委員会, 発行者:中村安孝, 昭和49年
42 長崎県	佐賀県史 中巻	編者:佐賀県史編さん委員会, 発行者:中村安孝, 昭和49年
	佐賀県史 下巻	編者:佐賀県史編さん委員会, 発行者:中村安孝, 昭和49年
	長崎県史 古代・中世編	著作権者:長崎県, 編集者:長崎県史編集委員会, 発行所:株式会社 吉川弘文館, 昭和55年
	長崎県史 藩政篇	著作権者:長崎県, 編集者:長崎県史編集委員会, 発行所:株式会社 吉川弘文館, 昭和48年
43 熊本県	長崎県史 近代篇	著作権者:長崎県, 編集者:長崎県史編集委員会, 発行所:株式会社 吉川弘文館, 昭和51年
	長崎県史 対外交渉篇	著作権者:長崎県, 編集者:長崎県史編集委員会, 発行所:株式会社 吉川弘文館, 昭和61年
	熊本県史 総説編	編集兼発行人:熊本県知事 寺本広作, 発行所:熊本県, 昭和40年
	熊本県史 近代編第1	編集兼発行人:熊本県知事 寺本広作, 発行所:熊本県, 昭和36年
	熊本県史 近代編第2	編集兼発行人:熊本県知事 寺本広作, 発行所:熊本県, 昭和37年
	熊本県史 近代編第3	編集兼発行人:熊本県知事 寺本広作, 発行所:熊本県, 昭和38年
44 大分県	熊本県史 近代編第4	編集兼発行人:熊本県知事 寺本広作, 発行所:熊本県, 昭和38年
	熊本県史 現代編	編集兼発行人:熊本県知事 寺本広作, 発行所:熊本県, 昭和39年
	大分県史 古代篇Ⅰ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和57年
	大分県史 中世篇Ⅱ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和60年
	大分県史 近世篇Ⅰ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和58年
	大分県史 近世篇Ⅱ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和60年
	大分県史 近代篇Ⅳ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 平成2年
	大分県史 近代篇Ⅰ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和59年
45 宮崎県	大分県史 近代篇Ⅱ	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和61年
	大分県史 民俗篇	編集:大分県総務部総務課, 発行:大分県, 昭和61年
	宮崎県史 通史編 古代2	編集発行:宮崎県, 平成10年
	宮崎県史 通史編 中世	編集発行:宮崎県, 平成10年
	宮崎県史 通史編 近世下	編集発行:宮崎県, 平成12年
46 鹿児島県	宮崎県史 通史編 近・現代1	編集発行:宮崎県, 平成12年
	宮崎県史 資料編 民俗1	編集発行:宮崎県, 平成4年
	鹿児島県史 第2巻	著作権発行者:鹿児島県, 昭和15年 ※復刊 編集発行:鹿児島県, 昭和42年
	鹿児島県史 第3巻	著作権発行者:鹿児島県, 昭和16年 ※復刊 編集発行:鹿児島県, 昭和42年
	鹿児島県史 第4巻	著作権発行者:鹿児島県, 昭和18年 ※復刊 編集発行:鹿児島県, 昭和42年
	鹿児島県史 第5巻	編集発行:鹿児島県, 昭和42年
	鹿児島県史 第6巻上巻	編さん兼発行者:鹿児島県, 平成18年
	鹿児島県史 第6巻下巻	編さん兼発行者:鹿児島県, 平成18年
47 沖縄県	沖縄県史 第1巻 通史	編集発行:沖縄県教育委員会, 昭和51年
	沖縄県史 第3巻 各論編2 経済	編集発行:琉球政府, 昭和47年
	沖縄県史 第5巻 各論編4 文化上	編集発行:沖縄県, 昭和50年
	沖縄県史 第6巻 各論編5 文化2	編集発行:沖縄県教育委員会, 昭和50年
	沖縄県史 第22巻 各論編10 民俗1	編集発行:琉球政府, 昭和47年
	沖縄県史 第23巻 各論編11 民俗2	編集発行:沖縄県, 昭和48年

Transmission of Textile Techniques of Modern Japan: With Focus on the History of Prefectures

KIKUCHI Riyo and NAKAMURA Yayoi

Until now research on textiles has been made on the characteristics of manufacturing regions based on expression of designs and techniques employed. But interchange of information among regions has been limited to the regions where such information was transmitted. In the present study, focus is placed on the history of prefectures throughout Japan in order to obtain information nationwide. Information concerning interchange of textile techniques among regions as noted in these histories was sorted out.

Information related to textiles was selected from about 250 publications of the history of prefectures throughout Japan. Contents of a total of 5,115 items were categorized based on the following points.

- * Were the textiles produced for sale or for domestic use?
- * Were the textiles target of protection by the local governing bodies?
- * How were raw materials procured?
- * How were finished products dealt with?

Information concerning these points was thought important fundamental material for considering the transmission of techniques and distribution of products.

Items related to technical interchange were further categorized by raw materials (silk, cotton, indigo, benibana), tools and techniques as well as types of products (pongee or ikat).

Since some of the entries showed the factors that contributed to the transmission of techniques, for example intentionally transmitted by order of the domain or coincidentally brought in by people, they were also selected and arranged.

In the future, it is hoped that the actual situation of technical interchange in the modern period will be made clear.

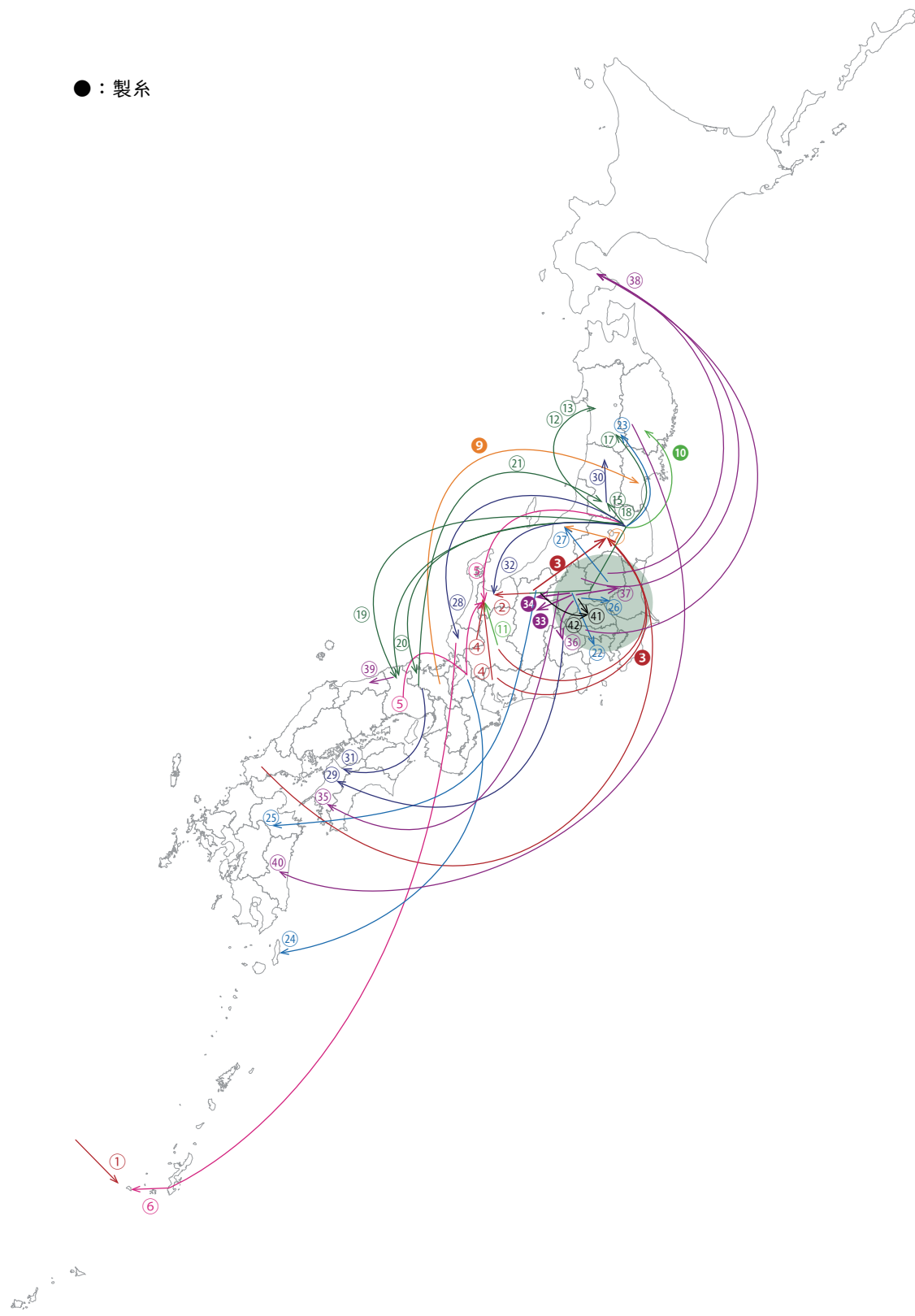


図1 養蚕・製糸

(see p.104)

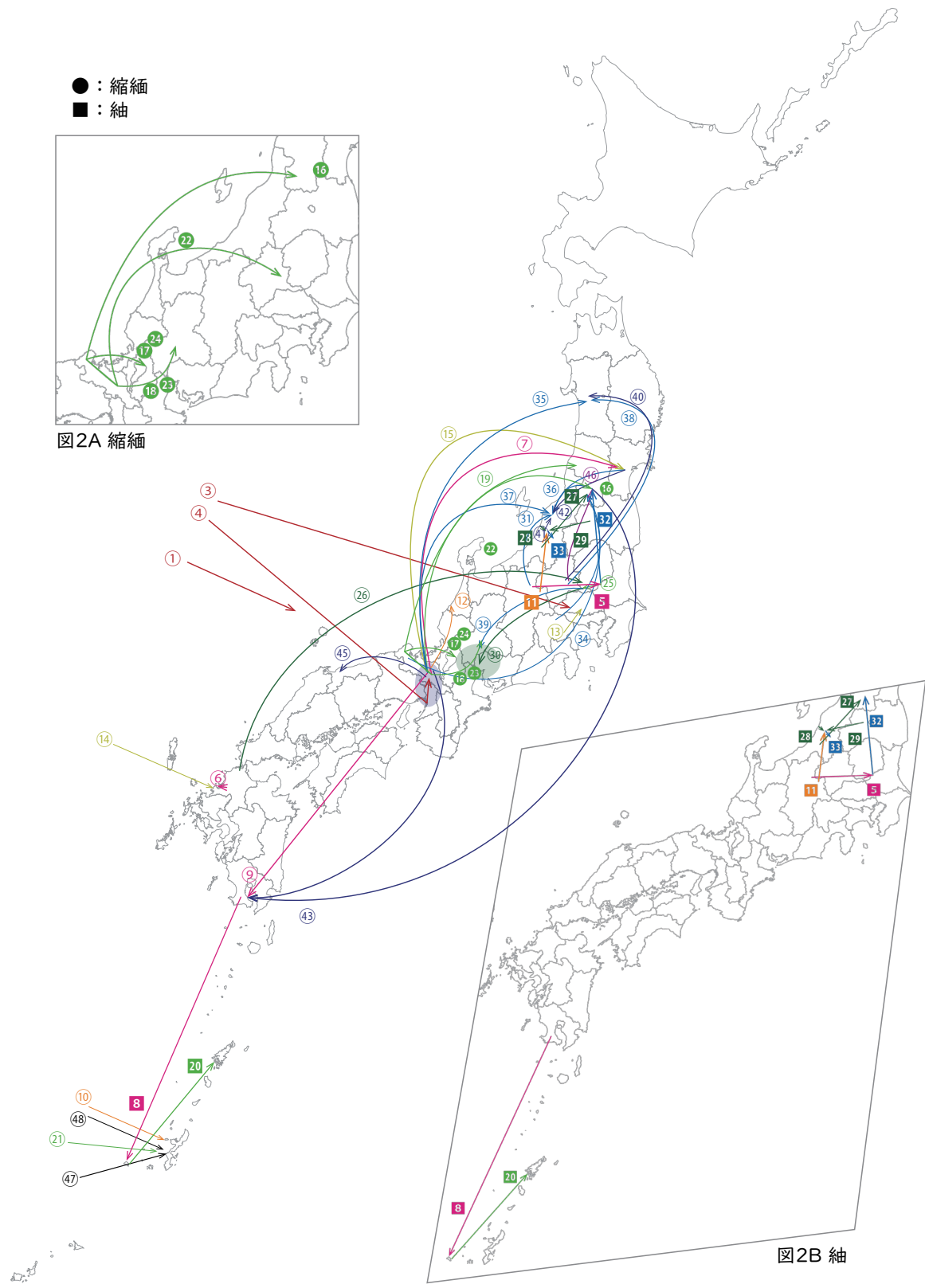


図2 絹織物

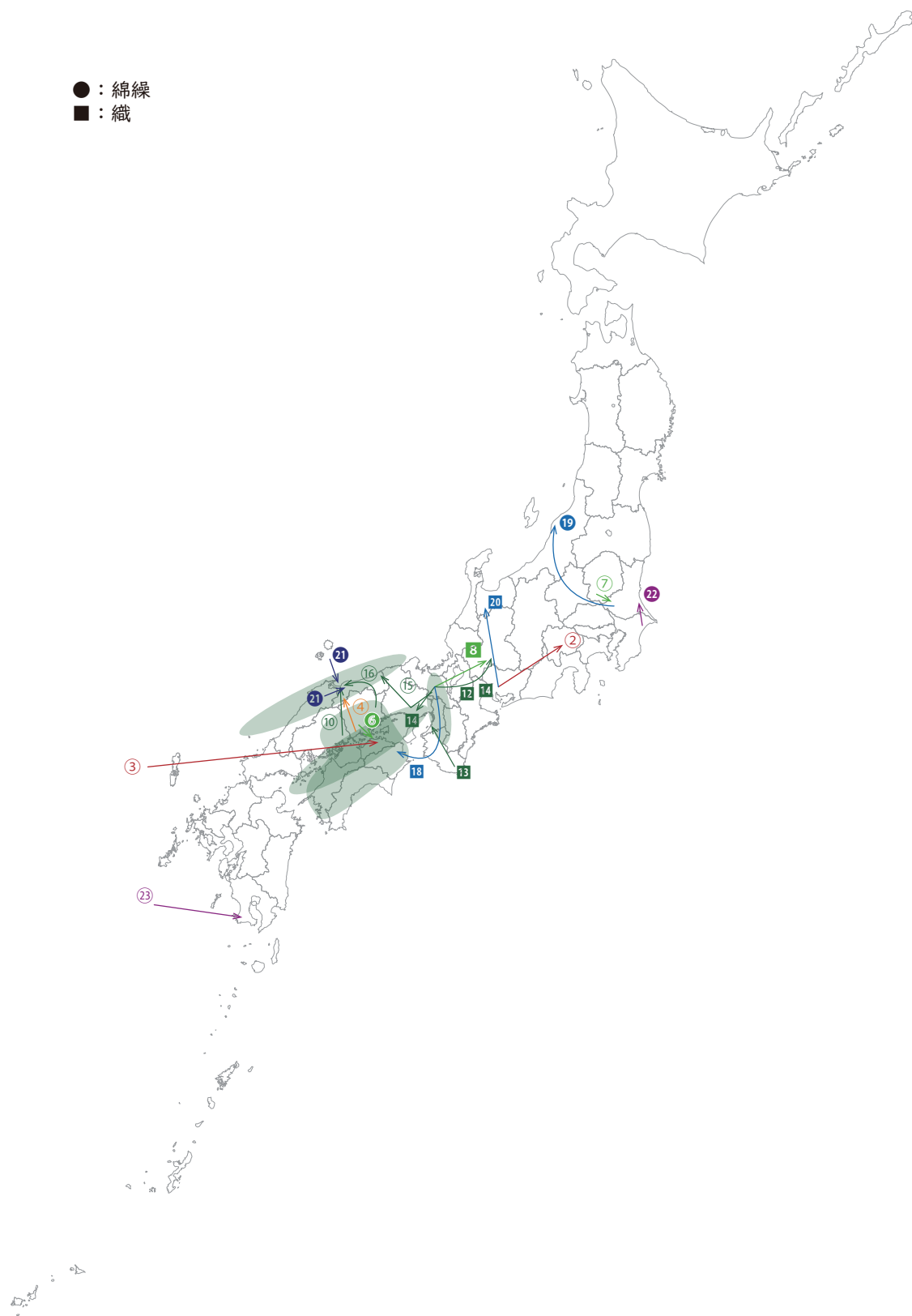


図3 木綿・木綿織

(see p.110)

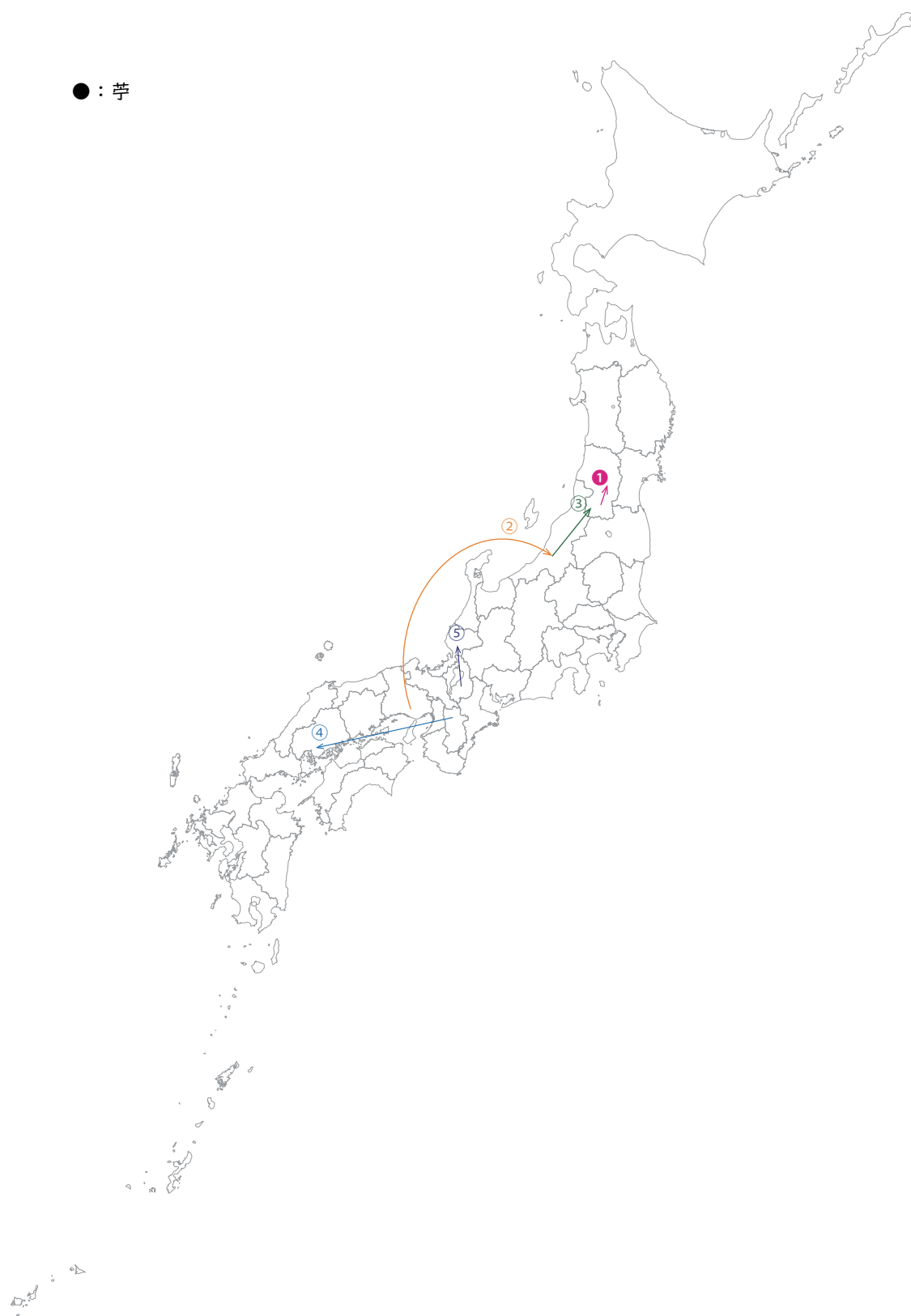


図4 麻・麻織物

(see p.112)

●：藍（染）

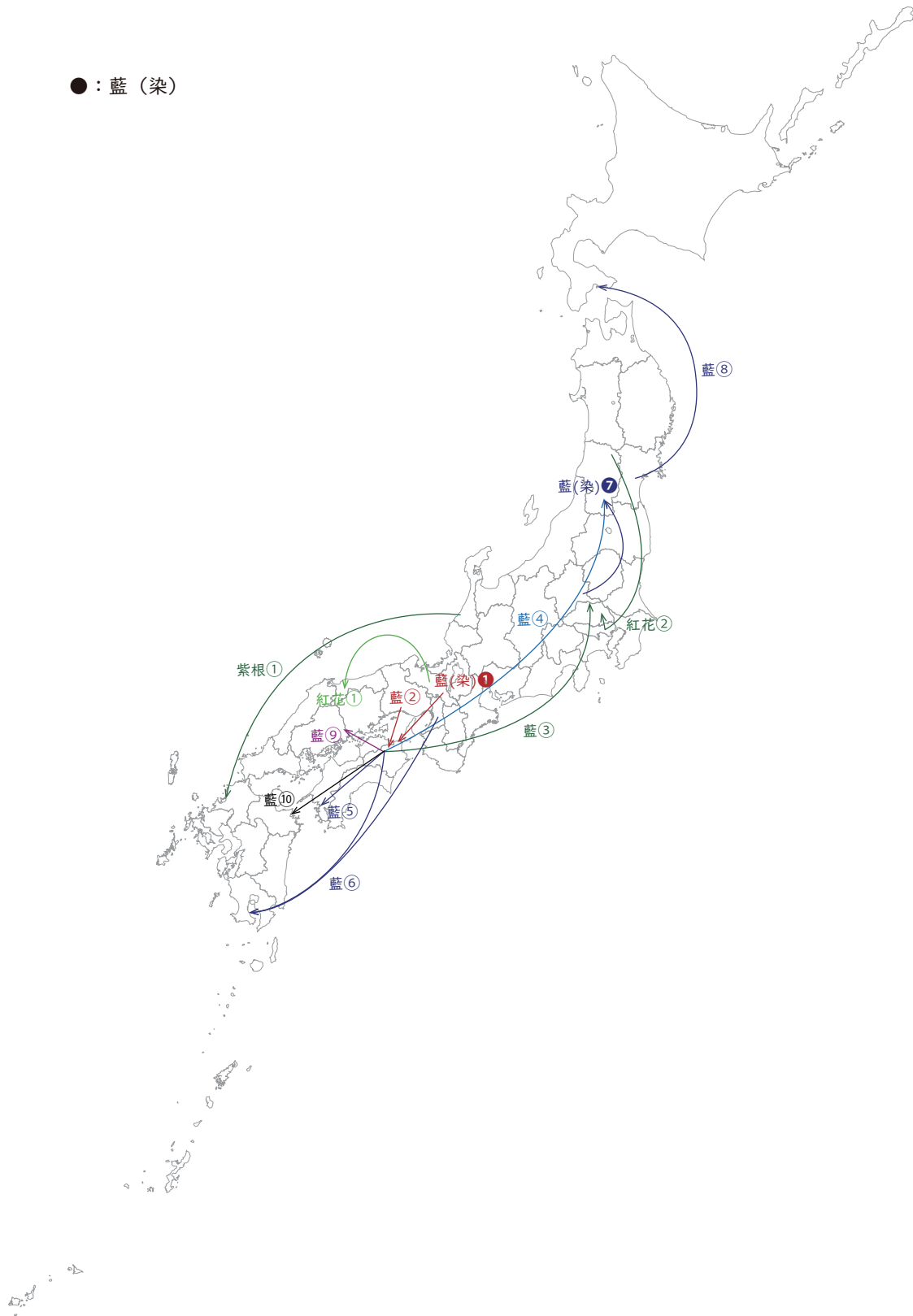


図5 藍・紅花・紫根

(see p.114)

●：座繰り

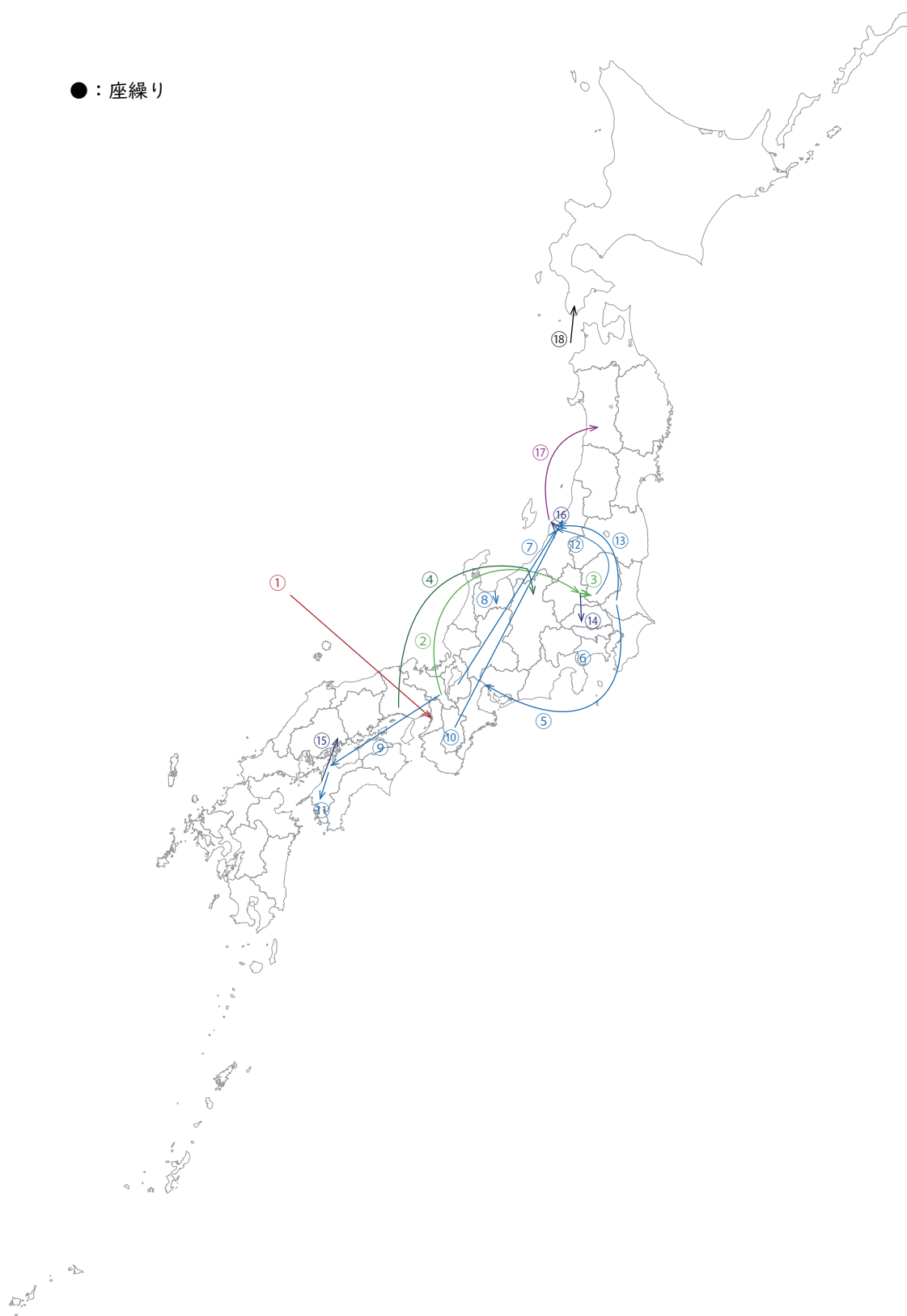


図6 機

(see p.116)

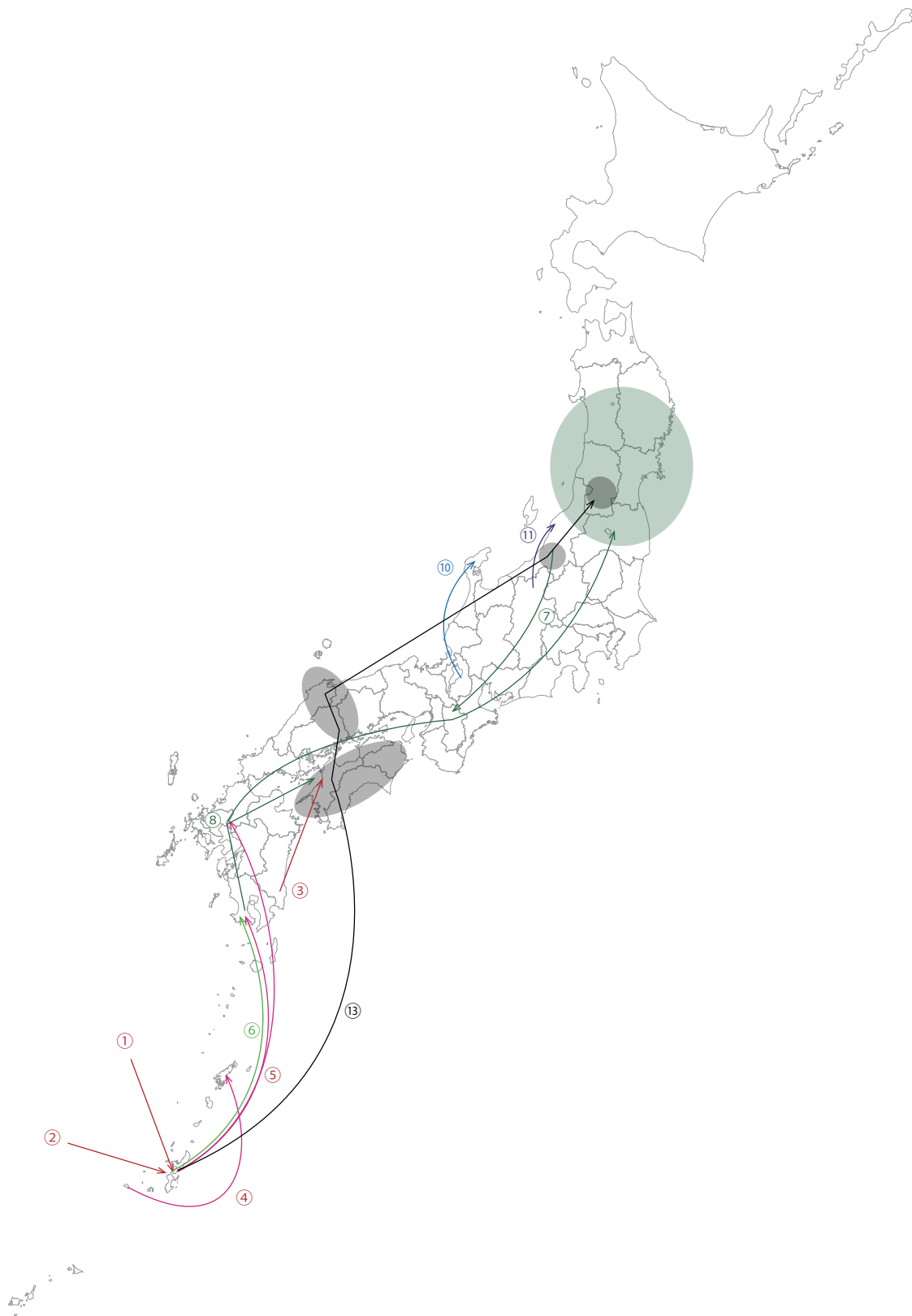


図7 絹

(see p.118)

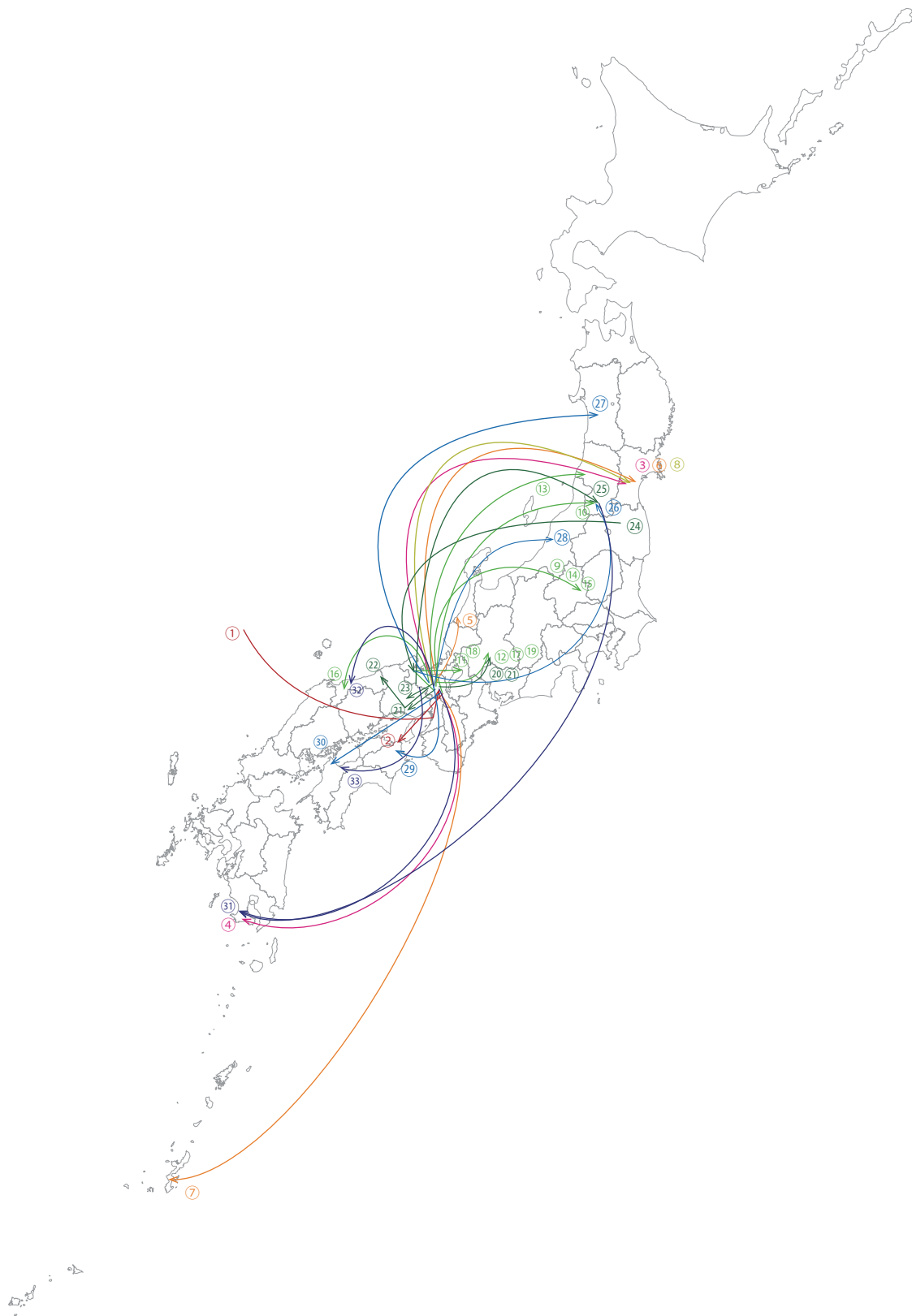


図8 山城 特に西陣・丹後からの移転